
闇に囚われし番人

虚鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に囚われし番人

【Nコード】

N0250M

【作者名】

虚鏡

【あらすじ】

千年パズルが完成したことで、王が目覚め、邪悪な闇と闇の番人も目覚める。これは未来を賭けた、大きな決闘の物語――。城之内轟眞の原作沿い（に、なるよう頑張ります）。

序章

闇の揺らめきは王の目覚め

強大で邪悪な闇の力の目覚めの兆候

それは絶望の始まり

王の目覚めは番人の目覚め

神によって生贄にされた闇の支配者

それは微かな希望の光か

番人の役目は見守り、護ること

これから始まる王の試練を見守り、数多の敵から王を護ること

永きに渡り眠り続け、囚われ続けた鎖からの解放

それでも呪縛からは逃れられず

それが契約、それが運命

王のため 未来のため 世界のため

闇の番人は動き出す

今、未来を賭けた決闘が始まる。

序章（後書き）

不束者ですが、どうぞよろしく御願い致します。

王を護る者（1）

担架に乘せられて運ばれて行くじいちゃんを見送る。

僕はじいちゃんに渡されたデッキをぎゅっと握り締める。

海馬君に破かれてブルーアイズはもう無いけれど、このデッキで必ず海馬君に勝つ。

そう決意した時、デッキを握り締める僕の手の上に、誰かの手が重なった。

「えっ？」

驚いて手の主を見上げた。

まず目を引いたのは太陽のような見事な金の髪と、優しげに細められた琥珀の瞳。

僕と目が合うと、手の主はにこりと笑んで、そして海馬君を睨みつけた。

海馬君は不愉快そうに顔を歪めた。

「悪趣味なゲームだな、海馬瀬人」

「誰だい、君は？」

「誰だっというんだろう？それより海馬瀬人。聞けばお前と遊戯が戦うのは最上階、つまり最後ってことだろ？遊戯はお前を倒さなきゃいけないんだ。無駄な体力使ってらんねえ。そこでだ。俺を遊戯のボディーガードとして参加させちゃあくれないか？」

ニヤリと笑って彼が海馬君に提示したとんでもない提案に僕は驚愕に目を見開いた。

彼は見ず知らずの僕のために、海馬君のゲームに付き合うと言うの

だ。

海馬君も、訝しげな顔をして彼を見る。

「何故君がそんな役を買って出るんだい？」

「うーん？ そんなのどうだっていいだろ？ 俺の案、承諾するのかしないのか、どっちなんだ？ お前にとっても悪い案じゃないと思うが？」

こんなこと言ったら悪いとは思うけど、ニヤニヤと笑って海馬君の答えを待つ彼はなんだか悪徳商売人のようだ。

「……………いいよ。君の参加を認めてあげる」

海馬君はにこりと笑みを浮かべた。

真っ黒な笑みを。

「どうもありがとう、海馬瀬人。お優しいあなた様に感謝いたします」

僕は思わず感心してしまった。

彼もまた、海馬君に負けず劣らず真っ黒な笑みを浮かべている。

「ちょっと待った!!」

突然割って入ってきた聞き覚えのある第三者の声に二人は同時に声の主を振り返る。

「本田君!」

「よお、遊戯」

個性的な髪型の――人のことは大いに言えないが――彼は、クラスメイトの本田ヒロト。

血の気の多い不良で、どちらかというところと近付きたくない人種なのだが、とある件で協力して以来すっかり友達になったのだ。

「そのゲーム、俺も挑戦させてもらうぜ」

「誰だ？」

「おう、初めましてだな。俺は本田ヒロトってんだ。遊戯とじいさんには仮があつてな。俺も助太刀しようと思って。・・・まあ、そうじゃなくても、友達だしな」

「ふーん」

彼は、ただ笑んだ。

海馬君に向けたようなあの悪質なものでもなければ黒いものでもない。

彼のことなど全く知らないけれど、でも今の笑みが彼の彼らしいものだというのが何となく分かった。

「だってさ、海馬瀬人。良かったな。こいつもお前の悪趣味なゲームに付き合うつてよ」

くると、上機嫌に彼は海馬君を振り返った。

見上げた横顔は今から悪戯をしでかす子供のように笑っている。

「愉快的ゲームの始まりだな」

派手に大きな扉の中に入って——言っちゃあなんだが、人一人殺すのにこんな大掛かりな物を作る必要がどこにあるのだろうか？しかもその殺す理由がなんとも幼稚で呆れる——これまたやけに凝ったデザインで長くて薄暗い廊下を遊戯と本田を横に歩き続ける。暗いのは嫌いだ、これぐらいならどうということはない。

「ねえ」

「ん？」

「君、名前何ていうの？」

年齢身長平均以下の遊戯に見上げられ、そして尋ねられ、そういえばまだ名乗っていなかったことを思い出した。

「悪かったな。俺は城之内。城之内克也。好きに呼んでくれ」

俺が名前を言うと、遊戯は笑顔で「城之内君」と言った。

本田も倣うようにして「城之内」と言った。

俺もとりあえず「おう」と返す。

「城之内君。あの・・・ありがとう」

「うん？何が？」

「このゲームに参加してくれたこと。見ず知らずの僕の為にこんな・・・」

「気にすんなよ遊戯。悪いのは海馬瀬人だろ？老人は大事にしなきゃいけないのに、あの野郎・・・」

海馬のことを思い出して、俺は顔を顰めた。

あの魂は、本来はもつと輝いているはずなのに。
なのに。なのに今は・・・

「濁った光さらしやがって・・・」

「？何か言った城之内君？」

「何も」

今は海馬のことを考えるのはやめよう。

今は、ただ彼と、彼の友達を守ることだけを考えればいい。

暫く歩いてようやく扉を見つけた。

とはいってもまだ少し先だが。

そしてふと感じた気配につい眉を顰める。

何故この気配があのかうからするのだろうか？

「・・・・・・遊戯」

「何？」

「お前の友達で・・・助けて!!」

大事なことを訊こうとしたその瞬間、扉が開いて中から気配の主が出てきた。

遊戯も本田も、俺も知っている遊戯の幼馴染。

「「「あーっ!!」」」

顔を見合わせて叫んだ声が反響する。
うるせえ。

「な、何で杏子がここにいるの!？」

そうだ。何でこいつがここにいるのだろうか。

彼女は遊戯の幼馴染で、遊戯を友達として——強調すべきだろうか？ いやいや止めておこう——大事にしてくれている存在だ。

その彼女が何故こんな遊戯の命を危うくする所にいるのだろうか。

答えは3, 2, 1、と数える間もなく返ってきた。

「前のバイト首になっちゃって」

それは何とも憐れな理由だ。

しかも首になった理由が客に痴漢にあつての正当防衛。

もう一度言おう。憐れだ。

「ねえ」

「ん？」

「あんた誰？ 遊戯の友達？」

おっとそうだった。

俺は知っててもこいつは俺の事を知らないだった。

「城之内克也だ。好きに呼んでくれ。それと、遊戯とは今友達になった」

同意を求めて遊戯を振り返れば、遊戯は目を瞬かせていたものすごくに嬉しそうに頷いてくれた。

「へえ、そうなんだ。あたしは杏子よ。よろしく城之内」

「よろしく」

さてさて自己紹介が終わったところで俺は変な防具を着けさせられ

た。

どうやらこのゲームには必要な物のようで、相手の心臓の部分にある箇所に銃の光線を当てれば勝ち、というらしい。

そして逆にこっちが当てられたら負け。

当たったら軽く痺れる程度の電流が流れる仕組みだという。

それが本当に、正当なただのゲームならば。

「遊戯、本田」

「何？」

「何だよ？」

「お前ら、このゲームが何か忘れてねえよなあ？」

「・・・『死のゲーム』、でしょ？」

「その通り」

くるっと踵を返して俺は扉の前まで歩み寄る。

貰った銃を、ポイツと杏子に向かって放る。

「ちょ、ちょっとあんた！」

「慣れねえ武器はいらねえ」

『死のゲーム』、しかも復讐の為に作られたこのゲームが、正々堂々真っ向勝負な平等ゲームなわけがない。

あの男が、復讐の為にそんな生易しいこと考えるわけがない。

「遊戯。俺はお前のボディガードだ。だからお前を護る為なら無茶でも何でもやってやるよ」

一歩踏み出して、俺は光の向こうへ駆け出した。

簡単な仕事だと、思ったんだ。

相手は戦場も殺戮も知らない素人の餓鬼。

その道のプロが三人も揃ってるんだ。すぐに終わると思った。

楽な殺^{ゲーム}しだと、思ったんだ。

そいつは壁を越えて現れた。

壁の上を重力を感じさせない動きを見せて、実に静かに、気配無く
ジョニーのいる壁の上に。

俺たちを見下ろすそいつの瞳の、なんと冷たさ。

氷なんて生易しいくらいにその瞳は冷たかった。

感情の感じられない琥珀の目を細め、そいつはジョニーを見た。

ジョニーはそいつが気配無く現れたことと瞳に気圧されて完全に動きを止めてしまっていた。

そいつは壁の上を軽く蹴って、ジョニーの脳天に重い踵を落とした。

「がっ・・・!!!!」

その一撃で、ジョニーは気絶した。

そこで我に返った俺たちは、すぐにレーザー銃の照準をそいつの心臓部に合わせて撃った。

が、そいつは見越していたのか既に壁に隠れていた。

俺とボブは背中合わせになっていつでも撃てるよう身構える。

俺はあいつがいつ襲ってくるか分からない緊張感に苛まれながら、雇った海馬瀬人を恨んだ。

素人だと聞かされた。ただの餓鬼だと聞かされた。
なのにこの状況は何だ!?

たった一人の餓鬼に仲間の一人はやられ、俺たちは振り回されている。

その事実、冷汗を流した俺の頭上から、クツクツと嘲う声が聞こえた。

「恰好の的、だぜ?おっさんたち」

ハッと上を見上げた時にはそいつはボブの顎下に拳をくらわしていた。

俺はそいつに銃を向け、撃った。

それが、俺が出来た最後の足掻きだった。

レーザーはそいつの頬を掠めただけで、そいつの足を止めることはできなかった。

一瞬の隙に、鋭い痛みが腹を直撃する。

哀れむように嘲う血のような美しい深紅が、俺の最後の見たものだった。

ゝ4ゝ(前書き)

お気付きでありましょうがこの物語にジョージは出ていません。

めんどくさいわけでもなく・・・ただあのキャラはあまり好きではありませんので、あえて出さなかっただけです。

書き忘れたとか、今更書いてもなあ、なんて思ったわけじゃあないですよ？本当ですよ？

呆氣ない。

城之内が思ったことはそれだけだった。

相手は素人どころかその道のプロだというのに、城之内は小物を相手にしたかのような冷めた目で倒れている相手を見下ろしていた。

「・・・呆氣ねえ」

つまらない。つまらなさすぎる。

こんなものが、お前の力だというのか？

こんなものなど比べられないほどの力を有していて、これが？
だとするなら、とんだ期待外れだ。

「城之内君、大丈夫？」

掛けられた声に城之内はハッとして振り向いた。

いつの間にか駆けつけたらしい遊戯たちが、心配そうに自分を見ている。

そこで己の失態に気付いた城之内は、困ったように頬を掻いて遊戯たちに笑いかけた。

「おう。俺は大丈夫だぜ、遊戯」

「でも・・・」

「ちよつと考え事があって、ぼーつとしてただけだ。怪我とかしてねーよ。レーザー銃はヤバかったけどな」

「ヤバかったって・・・？」

「うーん？マジで殺す気だったってこと」

城之内はケラケラと笑いながらとんでもないことを言ってくれた。

「……どういう意味？」

「レーザー銃、アレ、当たってたら死んでたぜ？俺たちのと比べりや分かる」

ぽい、と城之内は床にあった相手の銃を本田に放り投げた。

あぶねーな、と本田は文句を言いながらもちゃんとキャッチした。

「……城之内の言うとおりでな。見た目は同じだが、造りが全然違え」

「だろ？」

彼は相変わらずケラケラと笑っている。

一歩間違えてたら死んでいたかもしれないのに、それでもケラケラと笑っている。

「あのね城之内君、笑い事じゃないよ？君死んでたかもしれないんだよ？」

「生きてんだからいいだろ？」

なんとも陽気に、なんとも朗らかに、彼は笑う。

「そういう問題じゃ……」

「俺にとったらそんなもの。遊戯たちに怪我がなくて良かったぜ」

にこにこと笑う城之内に、遊戯は少し恐怖にも似た寒気を覚えた。彼は、死が恐ろしくないのだろうか。

「それより早く次のステージ行こうぜ。早く終わらせて、じいさん

の見舞いついでに勝利報告しに行こうぜ」

「・・・うん！そうだね」

遊戯は、今しがた過ぎった考えも感情も胸の奥に閉まった。
城之内の言う通り、今は海馬を倒すのが先決だと、思い出し。

十十十

その様子をモニターで見っていた海馬は、不思議なことにあの戦況を見ても悔しさも怒りも感じていなかった。

むしろそれが当然だというふうにモニターを見ているのだ。

それはここで死んではつまらないとか、遊戯には自らの手で止めを刺すとか、そういう考えからくるものではなかった。

当然なのだ。

あの男が、あんな簡単な殺しで死ぬわけがない。殺せるわけが無い。
あの男を殺せるのは、殺すことが出来るのは、殺すことを許されているのは・・・

「・・・」

そこでピタリと思考は止まる。

今の今まで自分が考えていたことを海馬は嘲笑った。

人間は簡単に死ぬ。

死なぬ人間など、この世にありはしないのだ。

「・・・」

海馬は再びモニターに視線を移す。
モニターの向こうでは、遊戯たちが次のステージに向かう「死の電気椅子ライド」に乘せられていた。
進む先には闇への入り口。

「・・・終わったな」

果たしてそれは何に對して、誰に對しての言葉だったのか、言った本人である海馬にすら分からなかった。

十
十
十

体に触れる機械の手。吹きかけられる生温い風。
周りには幽霊や妖怪の模型と、薄暗い闇。
好都合だ。

城之内はニィと不気味に口角を上げて、ゆっくりと瞼を閉じる。
すると、黒い靄が城之内を覆うようにして集まった。

黒い靄が城之内を縛る拘束具に触れると、拘束具は音も無く、まるで最初から無かったかのように消えた。

椅子から立ち上がり、足音も気配も立てずに後ろに行く城之内を取り囲みながら黒い靄もついてくる。

機械を操作するのに夢中の執事は近付いた城之内には全く気付いていなかった。

城之内はそんな執事を見下ろし、にこりと笑って口を開いた。

《楽しいか?》

「!?!?」

それは音にはならない声だった。

脳に直接語りかけるような声に執事は驚愕の形相で城之内を見上げた。

彼は周りに闇を従えて、残酷なまでに綺麗な笑みを浮かべていた。その瞳は、血と見紛うかのごとく紅く光っている。

《運が悪いな、あんた・・・闇は俺の領域なんだ・・・》

くっくつと、音の無い嘲笑いが脳内に響く。

《恨むなら、俺じゃなくて自分を恨めよ?人を殺すってことはな、自分も殺されるってことなんだからよ》

城之内の手がゆっくりと執事に向かって伸ばされる。

たったそれだけで執事の全身を恐怖が襲った。

立ち上がって逃げようと思っても、体はまるで金縛りにあったかのように動かない。

キョロキョロと、助けを求めるように動く視線に、城之内は笑みを深くした。

ここには、お前の機械のせいで身動きの取れない遊戯たち以外誰もいないというのに。

城之内の手が、執事の目を覆い隠す。

体温など無いのではというくらい冷たい手に、執事の背中を寒気のはしった。

《あばよ。素敵な旅路へ》

城之内のその言葉を最後に、執事は黒い靄に包まれ、枷の時と同じように、最初から存在していなかったかのように消え失せた。

十
十
十

ゆっくりとライドが動きを止める。

あの拷問のような――途中でそれは止まったが――目に遭っても最後まで声を出さずに無事に生き抜いたことに、遊戯たちはそれぞれ安堵の息を吐いた。

執事のいた椅子に座ってその様子を見ていた城之内は、ただ優しく微笑んでいた。

『鉄枷が壊れて立ち上がったら執事は卑怯にも自分の枷を外して逃げた』

それが、執事が座っていた筈の椅子に城之内が座っていたことの城之内が遊戯たちにした言い分だった。

なんとも苦しい言い分だったのだが、遊戯たちは訝しんでいたものの城之内のその言い分を信じた。

正直信じるとは思わず、つい信じるのかと訊いた城之内に彼らは笑顔でこう言った。

城之内を信じている、と。

城之内は数回目を瞬かせ、そして嬉しそうに笑ったのだった。

十十十

「ここが『殺人の館』・・・」

遊戯たちの前には、なんとも不気味な館があった。

既に名前からして不気味、というか物騒なのだが。

雰囲気作りにしてもこれは少しリアリティを求めすぎではなかろうかと、城之内は呑気なことを考える。

その時、ドクンと脈打つ鼓動を感じた。

チラッと視線をやれば、その鼓動は遊戯のポケットから感じれた。

そこに入っているのは、武藤双六が城之内の手を介して遊戯に渡し

たカードが入っている。
同じく鼓動を感じたのだろう遊戯が、ポケットからカードを取り出す。

「どうした遊戯？」

「カードが教えてくれてるんだ・・・！じいちゃんが危ないって・・・！」

「なんだって！？」

遊戯の言ったことを本田と杏は信じたようだ。

自分とはかく鼓動も感じていない二人がどうしてこうもあっさり遊戯の言ったことを信じるのか、城之内は悪いとは思いつつも二人を心配してしまう。

だが今はそんなことを気にしている場合ではないと、城之内は気持ちを手早く入れ替える。

「だったらちんたらしてらんねーな。行くぜ次のステージに！」

城之内の言葉を掛け声に、一行は館へと歩を進める。

そして閉ざされている扉を城之内と本田は意図せず同時に蹴り開けた。

その瞬間、城之内の顔が陰しくなった。

嫌な臭いがした。

埃の臭いに混じって微かに臭う、嗅ぎ慣れた嫌な臭いを城之内は嗅ぎとった。

どこからその臭いが漂っているのかも。

扉が閉められ、みんなで出口を探している中、城之内はじつと床を睨みつけていた。

その時、突然城之内の真上に海馬の姿が現れた。

その瞬間、ヒュッ、という空気を裂く音と、ドガガッ、という壁に

何かがぶつかる音がした。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

遊戯と杏と本田、そして海馬も音のしたほうを見上げた。

天井に深々と突き刺さっている極太の針。

ホログラフィー映像だったから何とも無かったものの、もしこれが生身だったらと思うと・・・。

思わず海馬は冷汗を流してしまった。

遊戯たちも少々顔を青くさせて針を投げた張本人を見る。

その極太の針を投げた張本人である城之内は、海馬のホログラフィーを見てムツとした顔をして言った。

「なんだよ海馬かよ。俺の近くに気配無くいきなり出てくるなよな！俺を殺人犯にするつもりかよ」

「「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」」

「・・・・・・・・・・そういう問題？」

ポツリと、遊戯が呟いた言葉をいつの間にか両隣に来ていた杏と本田はブンブンと首を振って否定する。

「で、何の用だよ海馬。こっから出るヒントでもくれんの？」
『・・・・・・・・その通りだよ』

遊戯の呟きはどうかやら聞こえなかったようで、城之内は不機嫌そうに海馬に問う。

海馬は、いかにも何か企んでますと言わんばかりの笑みを浮かべて言った。

童実野の湖のほとりにあるキャンプ場を訪れたボーイスカウトの少

年10人を一夜の間に切り刻んで惨殺した犯人——切り刻む男がこの館にいるというのだ。

彼は消息不明で捕らえられていなかったが、残酷な心を持つ者を必要としていた海馬が雇ったというのだ。
助かりたければ早く出口を見つけろ、と。

『フェアじゃないからね。出口への鍵ヒントを教えてあげるよ。——．．．
ところで、君はさっきから何をしているのかな？』

海馬が視線をやった先には、城之内が足で床を叩いていた。
木の床がコンコンと音を返すと、城之内は眉を顰めて別の床をまた叩く。

『聞ってるのかい？君は一体何をしているの？』

「あ、遊戯たちそこどいてくれ」

「「「．．．．．」」」

海馬の質問を完璧なまでにスルーして城之内は言った。
遊戯たちはチラチラと海馬を窺いながらその場から退く。
海馬はといえば、俯いていて顔は見えないが体の震えから苛立っていることは容易に知れた。

「お、見つけ」

さてさてそんな怒り頂点の海馬すらスルーしていた城之内はどうやら目的としていたものを見つけたようだ。

うきうきとした様子で背中に腕を回し、襟の中に手をつっ込んで中から鉄パイプを取り出した。
遊戯たちはギョッとして城之内に詰め寄る。

「えっ、ちょっ、城之内君！？何でそんな物持ってるの！？」

「いいえ遊戯！さっきは思わずスルーしてしまったけどあの針投げてる時点で既におかしいから！！何！？あんたは暗殺者にでもなるつもり！？」

「その無駄に長いロングコートは鉄パイプそれ隠すためのものだったのか！？」

詰め寄られている城之内は鉄パイプを掲げたまま困ったように笑う。

「えっと・・・離れてくれるとありがたいんだが・・・」

「一体何するつもり城之内君！？まさか鉄パイプそれでこの館壊すつもり！？」

「おお、よく分かったな遊戯。壊すのは館じゃなくて床だけだよ」

「何で！？」

「だってこの下、出口だぜ？」

城之内のその言葉に、その場の全ての時間が止まった、気がした。遊戯たちは戸惑ったように城之内を見る。

「今、何て・・・？」

「だから、この下が出口だって言ってるの」

『何の確証があって、そんなことを言うんだい？』

会話に入り込んできた海馬に、城之内は鼻で笑って答える。

「音が違う」

その一言で遊戯たちは何故城之内が床を叩いていたのかを知った。海馬は一瞬眉を顰めたものの、すぐにまた余裕な笑みを浮かべて言う。

『たったそれだけのことで？もしかしたら僕が仕掛けた罠かもしれないよ？』

「ああ、そうだな。これはお前の罠だ」

城之内は海馬の言葉を否定どころか肯定した。

驚愕の声を上げる遊戯たちをチラッと見やって、城之内は海馬を見上げる。

嘲りと愉快さと怒りと落胆が緋い交ぜになった琥珀色の瞳に見つめられ、海馬は何故か胸が痛んだ。

「確かにここにチョップマンはいるだろうよ。でも語弊がある。いるのはこの館の下だろ？出口の先にあるゲーム場にな」

遊戯たちはまたも驚愕に声を上げた。

ニヤリと笑う城之内に、海馬も笑って返す。

『その通り。よく分かったね』

「さっきから、嫌な臭いが下からするもんでね。随分と嗅ぎ慣れた臭いだ」

ズキリと、遊戯の胸が痛んだ。

遊戯は突然感じた痛みにビクリして胸を押さえた。

ズキズキと痛む胸と、痛みと同時に湧いた悲しみに遊戯は疑問を感じた。

何故自分は今、こんなにも苦しくて悲しいのだろう。

「遊戯？どうしたの？」

だが、その痛みも苦しみも悲しみも、杏が声をかけた瞬間消え去っ

た。

遊戯は今し方起こった自分の異変が突然消えたことに疑問を募らせながら、杏に大丈夫だと返す。

「時間が惜しいんだ。造ったやつらにゃあ申し訳ないが・・・壊さしてもらおう、ぜ！！」

言うと同時に、城之内は鉄パイプを振り下ろした。

バキッと音を立てて、木製の床が凹む。

城之内は鉄パイプを持ち上げ、もう一度、さっきよりも勢いよく振り下ろした。

ガンッ、と金属のぶつかる音がした後、カラカラと鉄パイプが転がる音。

よほど勢いよく振り下ろしたらしく、城之内は反動に耐え切れずに鉄パイプを手放してしまったようだ。

手が震えているが、城之内はそんなこと気にせず満足げに笑って遊戯たちを振り返った。

「あったぜ、扉」

「・・・そ、そうだね」

アハハ。

遊戯の大して大きくも無い引き攣った笑いが、やけに大きく聞こえた。

〵5〵 (後書き)

パソコンぶっ壊れて今まで書いてたデータ全部消えて、かなりショックでした。

最初に書いてたのと大幅に違いますが、まあいっか。
早くデュエル場面書きたいです。

のろまな更新のせいで全然進みゃあしない！

ゝ6ゝ(前書き)

注意するほどじゃないかもしれませんが、残酷描写あります。

城之内は本田も協力させて、床を壊していく。

先程城之内が放してしまった鉄パイプと、城之内が懐から出した金槌で。

あんたはドラ○もんか、という杏の突っ込みは笑顔でサラリと流されたが。

数分して、次のゲームへの入り口は現れた。

扉を通して感じる気配に城之内は警戒しながらチラッと上を見る。そこにはもう海馬のホログラフィー映像は無い。

「んじゃ、行こうぜ下に」

先頭きって扉を開けようとした本田の手を慌てて掴んで止める。

本田は怪訝そうに城之内を見る。

「どうしたんだよ城之内？」

「俺、さっき言ったよな？この下にはチョップマンがいるって」

「ああ、言ったな。でもよ、ここで立ち止まっててもしゃーねーだろ」

「その通りだな。だから下がれ、バカ」

「は？」

「迂闊に開けようとすんな。罠だって海馬も言ってただろ」

城之内にそう言われて本田はパッと手を引っ込めた。やれやれと肩を竦めて城之内は遊戯たちを振り返る。

「俺が先行くからよ。お前ら後から来い」

「え、でも・・・」

「修羅場は慣れてるから、俺」

またズキリと、遊戯の胸が一瞬痛んだ。

胸を押さえた遊戯を見つめながら、城之内は安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だよ」

城之内は扉を開けた。

中は暗く、地下へと続く階段の先は見えない。

「・・・」

一層酷くなった臭いに城之内は眉を顰める。

今すぐ扉を閉めてここから立ち去りたい思いに駆られるが、そんなことは出来るはずも無いので代わりに盛大な溜息を一つ吐いた。

できれば、あまり血生臭いのは見せたくなかったのだが、この奥にいる相手を“倒そう”となるとそうもいかないようだ。

“倒す”だけなら、まだ救いはあるのだが。

「・・・行くか」

だからといって彼らを立ち止まらせるわけにはいかない。

城之内は覚悟を決めて階段を下りる。

一歩進むたびに臭いは強くなり、闇は濃くなっていく。

やがて、台座のある小さな暗い部屋が見えた。

暗くて見えにくいのがチョップマンは確実にそこにいる。

潜める気も無い気配と臭いが嫌でも鼻につく。

遊戯たちも感じているのだろう。この場から全く動こうとしない。

どうしようか考えあぐねていると、また突然海馬の顔が映し出さ

れた。

「みなさん、いかがかな。海馬ランドの『死』のアトラクションを楽しんでもらえてるかい？」

「テメーの賢い頭脳で考えてみろよ。楽しんでも思ってるのか？」

城之内はにこりと笑って返す。

海馬はサラリと受け流すが。

「フフ・・・僕がゲームの中で一番好きなものはカードゲーム。その次がチェスゲームだね。君らは『海馬ランド』という巨大なチェス盤の上に並べられた『生きた駒』のようなものさ。僕は上から眺めながら君らを追い詰めていく。このゲームを存分に楽しませてもらうているよ」

「わお、悪趣味極まりねえ。遊戯、本田、杏。これ終わったら海馬のヤローをタコ殴りしようぜ」

城之内は満面の笑みでそう言った。

額に青筋を浮かべて目は全く笑っていない笑顔で。

「さて、次なるゲームだが・・・」

そんな城之内を無視して海馬は話を進める。

あのヤロー絶対え殺す、という城之内の呟きも当然無視された。

「この部屋の中のチョップマンとのゲームだ。誰か一人だけ入って来るがいい」

「なんだって!？」

「ハッ、馬鹿かてめえ。んなもん拒否るに決まってんだろ」

「フフ、そんなことしたらチョップマンは今すぐに君たち全員を殺

してしまうだろうね」

城之内は憎々しげに海馬を睨みつける。
どこまで腐ったやり方をすれば気が済むのだろうこの男は。
これ以上失望させてほしくはないというのに。

「クソ野郎が・・・」

「フフ、さあどうするんだい？誰がこのゲームの生贄になる？」

「よし、俺が・・・」

「待てよ本田」

恐れを抱きながらも前に進み出ようとした本田を城之内は制する。

「お前の行動は勇気なんて言わないぜ？無謀ひやくばって言うんだ。根性は認めるが、今のお前がやったって100%負けるぜ」

「でもよ・・・」

「俺が行く。それでいいだろ？——でだ、海馬お前に頼みがあるんだが？」

「何だい？」

「俺がそいつとのゲームを受けるからさあ、遊戯たちを次のステージに行かせろ」

頼みという割りに口調は命令形だ。

杏は城之内の肩を掴んで振り向かせる。

驚愕の表情をしているだろう自分とは違って、城之内は平然としていた。

その顔に、恐怖や絶望は見られない。

杏はそんな城之内に目を見開くが、キッと城之内を睨みつけて怒鳴ろうと口を開いた瞬間、

「いいよ」

杏と本田は海馬を振り向いた。
酷く驚いている様子だ。

まさか海馬が許可を出すなど、二人は微塵も思わなかったのだ。

「サンキュ、海馬」

「ただし君が負けたら、チョップマンは彼らを殺しにいくよ」

「ははは、無用な心配だぜ海馬」

「・・・」

「俺が勝つよ」

その自信が一体どこからくるのか、杏と本田には解らなかった。
相手は何人も人を殺した殺人鬼だというのに。

「先に行け。追いつくからさ」

「でも城之内・・・」

「うん、分かった」

城之内の言葉に応じたのは、遊戯だった。

意外な人物からの応じに杏と本田は言葉を失う。

優しく仲間思いの彼が、城之内の提案をあっさりと承諾したのだ。

「先行ってるね、城之内君」

「おう！」

城之内は振り返ってニカリと笑った。

遊戯もにこりと笑い返し、杏と本田の手を握って駆け出した。

一秒でも早く、この場から離れる為に。

「ちょっと遊戯！どうして城之内を置いていくのよ！！」

「そうだぜ遊戯！お前らしくないぞ！？」

「——いいんだ」

「遊戯！！」

「だって、あの場に僕たちがいることが、彼を殺すことになるんだから」

十
十
十

遊戯たちの姿が暗闇に消えていく。

城之内は何も言わず行ってくれた遊戯に感謝すると同時に不安を感じた。

残るといった自分を止めようとしなかった彼に、彼の者の影響を受けていなければいいのだが。

「・・・準備は？」

「いつでも」

「ならば中に入ってこい」

臆することなく城之内はチョップマンのいる部屋に入った。

「海馬サマ、早くあいつを切り刻ませてくで。チョッピー我慢できねえ」

「ゲームスタートの合図まで待て」

「・・・」

「ゲームのルールは簡単だ。スタートの合図と共にお互いこの部屋にある好きな武器を取り、どちらかが死ぬまで戦うんだ」

城之内は天井を見上げる。

吊るされているのは沢山の武器。

それを使って戦えということだろう。

「台座に登れば手が届くだろう。床のタールに滑らないように気を付けることだ。それと、お互いに手枷をつけて戦ってもらう。城之内、そこにある手枷をつけろ」

台にぶら下がっている手枷を言われるがままにつける。
鎖の先はチョップマンの手枷と繋がっている。

「ゲヘヘ、ぶっ殺じてやるう」

「・・・躰がなってねえぞ、海馬」

「ゲームスタート！」

また無視かよ。いいようもう慣れましたよ。

城之内は心の中でいじけた。

「ゲヘヘ・・・どれにしようかな」

チョップマンは早速とばかりに台に上って武器を選んでいた。

馬鹿だなあ、こいつ。

城之内の口角が上がる。

殺し合いをするのに、敵に隙を見せるなんて。

「やっぱ、躰がなってねえよ、海馬」

構えた指の隙間に挟まれているのは、先程海馬のホログラフィーに投げた物と同じ極太の針。

投げられたそれは正確にチョップマンの足に突き刺さる。

「ぎゃあああああ!!!」

悲鳴を上げながらチョップマンは台から落ち、タールの床に倒れる。繋がっているために城之内も引っ張られるが、台の上に飛び乗ることで難を逃れる。

チョップマンを見下ろす目は冷たいが、その中に僅かな戸惑いが見える。

「余計なモンつけやがって・・・」

城之内は天井に吊るされている武器を適当に取って、跳び上がり、戸惑うことなくそれを振り下ろした。

ガシャン!と、刃がチョップマンの肩につけられていたカメラを貫いた。

ついでとばかりに城之内は思いっきり力を入れてチョップマンの腹に着地した。

モニターの画面は真っ暗になり、パラパラと破片が散る。

腹に入った衝撃に咳き込み苦しむチョップマンを見下ろす城之内の顔は清々しいほどに笑顔だ。

「これでやっと遊べるなあ、チョップマン?」

まるで今から友達と遊ぶかのように城之内は笑う。

だがその響きには、何も感じられない。

憤怒も恐怖も侮蔑も慈悲も、何もかも感じられない。

「お前さ、何の為に人を殺したんだ？」

掲げられた刃が薄暗い部屋の中でキラリと光る。

笑って鎌を掲げるその姿は、正に死神と呼ぶに相応しい。

「あの執事やつにも言ったけどさ・・・人を殺すってことはさ、自分が殺されるのと同じなんだぜ？自分が殺した奴の家族が、友人が、知人が、自分を殺しにくるかもしれない。例えそいつらを殺したとしてもだ、じゃあ今度はそいつらの家族や友人や知人に殺されるかもしれない。お前は考えたことないだろ？ただ楽しむだけに殺してきただお前が、そんな覚悟したことないだろ？――殺しは罪。罪には必ず罰が降る。それがたとえどんな形であれ、だ。なあ、死よりもつらいことがあるのを知ってるか？死よりも苦しいことがあるのを知ってるか？知らないよな？知るわけないよな！安心しろよ。お前はそんなこと一生知ることばねえ。だって俺がこの場で殺してやるんだからな！！」

鎌が振り下ろされる。

刃が厚い肉を貫き、血をそこいらじゅうに撒き散らす。

「ぎゃあああああああ！！！！」

チョップマンが痛みに暴れまわる。

城之内はやはり冷めた目で見下ろし、血のついた顔には笑みを刻んで、刃を引いた。

ポチャ。

小さな水音を立てて、チョップマンの腕はあっさりと、簡単に斬り落とされた。

「ああ・・・っ」

チョップマンは呆然と失った自分の腕を見る。

肩から血が大量に溢れ出し、茶色と紅のマーブル模様をつくりだす。
なのに何故だろう。

斬り落とされたというのに、痛みを全く感じない。

「痛くないだろ？俺からのせめてもの優しさだ」

城之内の周りを黒い靄が漂っている。

瞳はチョップマンから流れ出るモノと同じ紅に染まっている。

「お前は切り刻む男なんだろ？だからさ、お前の体も切り刻んでやろうと思つてさ。次はどこがいい？指か？足か？それとも一気に胴体いつてみるか？」

掲げられる鎌。

ひつ、とチョップマンは怯えた顔で城之内を見上げる。

チョップマンのその反応に、城之内の肩が僅かに揺れる。

「・・・もう、いいや」

城之内は鎌を放り投げた。

チョップマンの上から下り、彼を見ることもせず告げる。

「いいぜ、喰らって」

それまでただふよふよと漂っていた黒い靄が、待ってましたとばかりに一斉にチョップマンに襲い掛かった。

骨が碎かれ、血は溢れ出し、撒き散らされ、肉が喰われていく。

それらの音は聞こえない。チョップマンの悲鳴が全ての音を奪って

響く。

ばたばたと降りかかる紅い雫。

城之内の顔を、髪を、服を、体を、どこまでも紅く染めていく。

「――俺の罰は、いつまで続くんだろうな・・・」

いつまで罪を裁き、いつまで罪を重ねればいいのだろう。

遊戯たちは次のステージがある何も無い白い部屋で城之内が来るのを待っていた。否、祈っていた。

城之内の負けは彼の死を意味し、同時に自分たちの死を意味している。

杏と本田は、ただただ彼が戻ってくるのを祈っていた。

ただ一人、遊戯だけは落ち着いていて、首にかけている千年パズルを抱えながらドアを見つめていた。

突然、部屋のドアが開いた。

緊張から一瞬体を強張らせた杏と本田は、部屋に入ってきた城之内の姿を見て息を吐くと同時に気が抜けてしまったのか、床に崩れ落ちた。

そんな彼らの様子に、城之内はきょとりと首を傾げた。

「お前ら何やってんだ？」

「あはは、心配してたんだよ、君のことを」

ギリりと睨み上げる彼らにますます首を傾げる城之内に遊戯が代弁する。

城之内はぼちぼちと目を瞬かせ、ムッと顔を顰めた。

「お前ら、俺が負けるとでも思ってたのかよ」

「当たり前でしょ！あんな殺人鬼に、一人に残って挑むとか言ってる……！」

「勝つって言っただろうが。それにな、あんだけ宣言しといて負けたら、かっこつかねーだろ」

「そういう問題じゃねえと思うが、ともかく、お前が無事でよかったぜ」

と言って、拳を突き出した本田に、城之内も笑って突き出す。
こつん、と二人の拳がぶつかり合う。

「にしても城之内。お前なんでそんな、汚れてんだ？」

本田は城之内を体を上から下まで眺めて言った。

今の城之内は服だけでなく頭や顔も茶色の液体でべとべとで、床にもぽたぽたと滴を落としている。

「これか？チョップマンと戦ってる時にちよっくらミスってよ、タールの床に転んじまってな」

「おいおい、大丈夫かよ？」

「平気平気。・・・誰かタオル持ってねえか？」

「俺が持つてるわけねーだろ」

「ハンカチならあるわよ」

「悪い、貸してくれ。ところでよ、見たとこまだゲームは始まってねえみてーだけど、オメーらずつとここに？」

「うん。部屋の中をみんなで調べ回ったんだけど、何にも無くて・・・
ただ、あそこ」

遊戯は斜め上を指差した。

そこにはこの部屋の出口らしき穴があるのだが、どう考えても床から10メートルぐらいは離れている。

人間梯子でもして抜け出せとも言いたいのだろうか。それとも壁をよじ登れと言いたいのか。

確実に一人二人は脱落するだろうが、何ともマヌケというかアホらしい作戦だ。

「なわけねーよ」

城之内は己の考えにツツコミをいれた。

突然奇怪な行動をした城之内を遊戯たちは不思議そうに見つめる。己のとった行動を自覚した途端、恥ずかしくなった城之内は若干頬を赤く染めて苦笑を浮かべた。

「いっがーい」

それに対して杏は本当に驚いた声を出した。

訳が分からず城之内は首を傾げたが、遊戯と本田はうんうんと頷いた。

更に訳の分からなくなった城之内に杏は悪戯を仕掛ける子供のよう
に笑って言う。

「あんたでも、そうやって照れるんだね」

「へっ・・・？」

「だってあんた、シューティングで敵の三人の倒しちゃうし、コー
スターの時はいつの間にか後ろにいたし、館の時は隠してた出口見
つけちゃうし、今だってチョップマンと戦って無事に戻ってきてさ。
なんかあたしたちとは違う次元の人みたいだったから、なんだかや
っと近づけたって気がしたんだ」

城之内は暫く目を瞬かせていたが、すぐにムツと顔を顰めた。

「まるで俺が人外みたいな言い方だなあ、オイ」

「ごめんごめん。そういうんじゃないのよ。でも城之内、館の時か
らずっと気になってたんだけど・・・」

「？何だよ？」

「あんた、今までの武器どっから出してたの？」

これには杏だけでなく、本田も食い入るように城之内をじっと見ていた。

ただ遊戯だけは、どこか悲しげに見つめてくるだけだった。

城之内は遊戯の表情に一瞬だけ目を細めた後、すぐに悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべた。

「どこって・・・こっからだぜ？」

二人の前に掲げた手を一度握り、拳を開くと、そこにはさっきまで無かった黒くて丸い物が指の間に挟まれていた。

「何だそれ!？」

「爆弾」

「ばばば、ばっ!？」

「安心しろよ。今回“は”使うことねえから」

“は”って何!？何その含みのある言い方!？」

城之内はただにこりと笑うだけだった。

それが余計に杏と本田を不安にさせる。

本当に、いつ使う気なんだろう。

「さてと、おふざけはここまでにして・・・俺は少し寝かさせてもらおうわ」

「え、何よいきなり」

「いや、俺結構疲れてんだわ。だからよ、まだ始まっていないうちに体力回復しとこうかと」

「いつ始まるかも分かんねーのか？」

「そんなときゃそんな時さ。まあ、一つ言えることがあるとすりゃあ・・・」

一度言葉を止めた城之内は、見た者をぞっとさせるような笑みを浮かべた。

「あいつは、ここで復讐ゲームを終わらせるような、そんな生ぬるい事はしねえ」

十十十

城之内が眠ってから一体どれ程の時間が流れたのだろう。

次のゲームが始まらない限り、遊戯たちは何もできず、この部屋に閉じ込められたまま。

遊戯たちは床に座って、ただゲームその時の開始を待っていた。

「・・・ごめんね」

「遊戯？」

「僕のせいで、こんな・・・」

「オメエのせいじゃねえだろ、遊戯。俺たちが勝手にお前に付き合っただけなんだからよ」

「でも・・・」

「それによ、だったらあいつは何なんだよって感じじゃね？」

本田は眠っている城之内を指差した。

「あいつは俺たちとはなんら関係無かったのに、それでもこのゲームに乗った馬鹿な奴だぜ？お前を守るためによ」

遊戯は思い出す。

双六が運ばれていったあの時、海馬のゲームに挑戦すると決意したあの時、本当はとても怖かった。

怖くて恐くて、逃げ出したかった。

その時、手を握ってくれたのは城之内だった。

大丈夫だと、一緒にいると、彼は勇気づけてくれた。

彼がいなければ、自分たちはきっとここまで来れなかっただろう。遊戯の顔に、自然と笑みが浮かぶ。

「ねえ！私、いいこと思いついちゃった」

杏が立ち上がって部屋を見回す。

「この真っ白な部屋、キャンバスみたいじゃん！私さ、友達と思いの場所に行ったらね、名前書いてきちゃうんだよねー！」

杏はそう言ってマジックを取り出した。

不思議なことに、一体それはどこから出されたのか遊戯も本田も見えていなかった。

彼女は先程城之内のことをドラ○もん扱いしたが、彼女も十分なれるような気が二人にはした。

「ほら、城之内。起きてよ！」

肩を少し乱暴に揺すられて城之内は目を覚ました。

その意識は随分とはっきりしているように見え、もしかして寝ていなかったのではと思わせる。

「どうした杏？ゲームはまだ始まってねーぞ？」

「いいから立って。ほら二人も。で、手を出して」

杏が出した手に倣うように皆が手を差し出す。
差し出された手の甲に、杏はマジックを滑らせる。
描かれたのは、大きなニコ絵。

「いい？これから卒業とかしてバラバラになって一人になってつらい時があったら、このピースの輪を思い出すの！今この場所で仲間がこーして一緒にいたってことを思い出して。私もニューヨークにダンスの勉強に行ったらいつでも思い出すから」

城之内はピースの右目の部分の描かれた手の甲を目の前に掲げる。
彼が手の甲を眩しそうに見つめるのを遊戯は確かに見た。

「マジックのインクなんてすぐに消えちゃうけど・・・あたし達の心の中で、この輪は決して消えることはないわ」

そう、杏が言った瞬間だった。

天井から白いブロックが落ちてきたのは。

「危ねえ！」

咄嗟に杏を強く押し、本田を蹴飛ばし、遊戯を引き寄せた。
まるで四人を隔てるかのようにブロックは真ん中に落ちた。

「ゲームだ！DEATH-3のゲームが始まったんだ！」
「・・・あのヤロー終わったら絶対に殴る！」

ぐっと握られた拳が城之内の決意を顕にさせる。
そうこうしている間にも、ブロックは一つ、また一つと落ちてくる。
どこに落ちてくるか分からないブロックから、遊戯たちは逃げ回る

しか術がない。

「くそー！こりゃ『死』の落ちゲーだぜ！もう逃げ場がねーぞ！」
「だからさっきから、死のゲームだって言ってるだろ」

「みんな、ブロックの上に乗るんだ！これはこの部屋からの脱出ゲームなんだよ！」

遊戯に言われて、城之内たちはようやくこのゲームが何であるかを知った。

だが、分かったところでこのゲームをクリアするのは難易だ。何故なら、ブロックがどこに落ちてくるのか分からないからだ。

「なるべく端には行かない方がいいよ！ブロックに閉じ込められたら終わりだからね！」

ブロックから逃れ、その上に乗り、時には城之内に押されたり蹴られたりしながら遊戯たちは出口を目指す。

「・・・めんどくせえ」

頭上に落ちてきたブロックをひよいと避けた城之内が呟く。
落下の時間も位置も分からない。

このままでは、少なくとも一人が、ここで犠牲になるだろう。
どうしたものかと頭を捻る城之内の横で、ふと杏の動きが止まる。

「ちょっと待って！」

「杏、どうしたの？」

「このブロックが落ちてくる間隔には一定のリズムがあるわ！ひよつとしたら、落下位置にも規則性があるのかも・・・！」

杏は目を閉じて集中する。

「そこ！」

目を開けて指差した先に、見事ブロックが落下した。

「すげえぞ！ブロックの落下位置をつかんだ！」

「これだけ大掛かりな仕掛けのゲームだと、逆にコンピュータプログラムは単純でなければ制御できないんだ！」

「よーし！あとはダンサーみてえな軽い身のこなしで出口までたどり着けば万事解決！ブロックさえ予測できりゃ、屁でもねえゲームだぜ！」

希望が生まれ、遊戯たちの顔に笑みが浮かぶ。

城之内も杏への賞賛の意をこめて笑うが、すぐに険しい顔に戻る。何度も言ったことだし、何度でも言えることだが。

海馬は決して、生ぬるい奴ではないのだ。

ブロック攻略の手段を見つけられたのはいい。問題はその先だ。攻略されたからといって、あいつが簡単に行かせてくれるかと問われれば答えは決まっている。

NO、だ。

そんな生ぬるい奴ならば、このゲームはもっと楽に進めたはずなのだから。

「城之内！そこ危ないわよ！」

杏に言われて城之内はハッとその場を飛び退いた。

ドスン、とブロックが城之内のいた場所に落下する。

「ぼーっとしてないでよ城之内！」

「悪い」

城之内は己の失態を反省してブロックに上った。その後も杏の指示のおかげで遊戯たちは着々と出口に近付いていた。

先に杏が出口に辿りつき、二番目に城之内が着いた。

「遊戯、急げ！」

本田が遊戯に手を差し出す。

その時、杏の予測していないところブロックが落ちてきた。

「本田！！」

あわやと思われたが、ブロックは本田の背中すれすれのところに落下したので、本田は無事だった。

「危なかったぜ・・・」

「本田、大丈夫か！」

「なんとか・・・」

「気を付けて！リズムの間隔が早くなってる！」

「急げ！」

間隔が早くなっているということは、出口が塞がれるのが早まるということだ。

二人を急かすため城之内は叫んだが、気合を入れたにもかかわらず動きを止めた本田に違和感を感じた。

「本田・・・？」

「遊戯！手を貸せ！早く！」

「本田くんが先に・・・！」

「いいから早くしろ！出口が塞がる！」

いよいよもっておかしいと感じた城之内は、遊戯を出口に引き入れて出口から飛び出した。

出口から出てきた城之内を遊戯たちは何をしているんだと怒鳴ってくるが、城之内はそんなの無視して本田に近付いた。そして気付く。

本田の制服の裾が、ブロックに挟まれていることを。

「・・・」

「ちっ」

「本田君！君・・・」

「城之内、俺のことは気にせず・・・」

「動くなよ」

「は？」

城之内は懷から取り出したナイフで制服の裾を切り裂いた。

そしてチラッと上に視線をやり、本田を出口に向かって投げ飛ばした。

その威力は突っ込まれた本田に遊戯と杏が奥へ押されるぐらい強かった。

「遊戯！」

名を呼ばれ、痛みに閉じていた目を開けて見えたのは、城之内の笑った顔。

「勝てよ」

伸ばした手は、落下したブロックによって阻まれた。

逃避

ドーム中に響く歓声。笑顔の仲間。

遊戯は約束通り、海馬から勝利を勝ち取った。

「おめでとう、王よ」

友の勝利を見届けて、彼は文字通りその場から姿を消した。

十
十
十

闇の中にぼかりと浮かんでいる光。

その光の中で、子供が何かを組み立てている。

周りに散らばるピースを拾って、組み立てて、合わなければ、また別の物を。

子供の手の中で「それ」はまだほんの一部しか出来上がっていない。子供は黙々と、単調で単純な作業を繰り返す。

「何だ。まだそれだけか」

突如、闇からの声。

ここには自分しかないと思っていた子供は、作業を一旦中断して声の方を振り向いた。

そこにはやはり闇が広がっていた。

子供の周り以外、ここは真っ暗な闇しか存在しない。

だが子供は見つけた。

闇の奥に、金の筋が揺れているのを。

「誰だ貴様は」

闇の奥でにやりと笑う気配。

「お前が分からないなら誰でもねえよ」

クツクツと笑う声には明らかならかいの色。

子供は顔を顰めて闇にいる者を睨む。

「馬鹿にしているのか貴様」

「とんでもねえ」

闇にいる者は相変わらずクツクツと笑う。

子供は気分を害したのかそっぽを向いて作業を再開した。

「そうそう。早く組み立ててくれよ」

子供は手を止めて闇の方を見る。

そいつは首でも傾げたのか金色が少し揺れた。

「貴様はこれが何か知っているのか？」

「知ってる。でも、お前がそれを知ってどうするんだ？組み立てないつもりか？」

「できるわけなからう。これが完成しなければ、俺はここから出られない」

「よく解ってるじゃねえか」

チャリ、と金属の擦れる音が響く。

遠くから聞こえていたその音が段々とこちらに近付いてくるにつれて、金色もまた近くなる。

そして見えたのは足元を覆う黒い布。

そいつは後一步というところで歩みを止めて、その場に座り込んだようだ。

チャリチャリと鳴る金属の音が耳障りだ。

「・・・こっちは来ないのか」

「来てほしいのか？」

「ああ。是非とも貴様の顔を拝んで、一発喰れてやりたいからな」

「怖い怖い。余計行きたくなかったよ。つっても、例えお前が何もしなくとも俺がそっちに行くことはできねーよ。俺は闇にいなきやいけねえんだ」

「何故だ？」

理由を訊いてもそいつは答えはしなかった。

ただ一言、仕方がないんだと言った。

それっきりそいつは沈黙してしまったので、子供は再び作業を開始した。

「なあ、何でお前だったと思う？」

「唐突に何だ」

「何で、『子供のお前』がそれを組み立ててると思う？」

「知るか、そんなもの」

「お前が、本来のお前だからだよ」

「何を言っている？」

「お前がお前であったのがその時までだったからさ。今までのお前を否定するつもりは無えよ？あれもお前であったのに変わらないしな。でもあれは本来のお前とは違う。堕ちて歪んで出来てしまった、

ある意味紛い物。だからこそ、間違いを正すのはお前でなければならぬ。……王も粹なことをしてくれたな」

「王？」

そいつは聞こえないように呟いたつもりだったのだろうが、生憎こんな静寂に満ちたこの場所でそんなのは無意味だ。

しっかりと呟きを聞き取ってしまった子供に、闇の者が仕方なさそうに肩を竦めたのが子供には手に取るように分かった。

「今はまだ知らなくていいことさ」

「つまり、いずれ知ることになると？」

「そういうことだ」

パーツの一つが組み合わさる。

それを見たそいつはおっ、と嬉しそうに声を上げた。

「……そんなに早くこれを完成させてほしいのか？」

「もちろん。すっごいムカつくけどな」

「矛盾してるぞ」

「俺にとったらちゃんと成立してるから問題なし♪」

「……貴様はいつまでここにいるつもりだ？」

子供の問いかけに闇の者は少しの間を開けて答える。

「……本当は、すぐにでも王の元に駆けつけなきゃいけないんだがな」

「ならばそうすればいいだろう。王を守るのが下僕の役目ではないのか？」

「勘違いするなよ？俺は下僕じゃない。でも護らなきゃいけないし護ろうとも思ってる。それだけだ」

「どっちにしろ、行かなければならないんじゃないのか。それとも責務放棄か」

「そんなつもりは無えよ。ただ・・・今回は会いたくない奴が相手だな、行きたくねえんだ」

「立派な放棄ではないか」

「だから違えっての。・・・いや、やっぱそうかもな。俺は自分の罪から目を逸らしたいがために、あいつらのとこに行かないのかもな」

「余程の大罪を犯したようだな」

「ああ、そうだな。あの時あいつを止めなかったのは俺の最大の罪だ。あいつに全てを押し付けて、俺は逃げたのさ。だからこそってわけじゃないが、俺は闇こゝろにいるんだよ。今度こそ終わらせるために」

「何を」

「それも追々知ることになるさ。何せお前も全くの無関係ってわけじゃ無えんだからな」

闇からそいつが手を伸ばす。

黒い衣の上から黒い鎖が何重にも巻かれている。

頬に添えられた手は氷を思わせるように冷たい。

「だから早くそいつを完成させて、俺の前に本来すがたのお前見せろよ。

パズルつーのは一つでもピースが欠けてちゃ完成しないんだ。王の為、あいつの為、俺の為、何よりお前の為に・・・早く起きろ、海馬瀬人」

まあ、起きた時には俺のことなんて憶えちゃいないだろうけどな。

再会

手に持っている小さな星を掌の中でころころと転がす。

この星は、ゲームの参加者には絶対の命。

その命を、手紙を置いてきたとはいえ盗んでしまった自分は、よほどの重罪人だろう。

罪悪感がないわけではない。

だが、どれ程罪を重ねようと、己には成さねばならないことがある。その為ならば――。

「だからごめん、遊戯・・・」

十
十
十

「？」

「どうしたの、遊戯？」

「・・・ううん、何でもない」

誰かに呼ばれたような気がしたのだが、どうやら気のせいだったようだ。

どうやら自分は、これから始まる闘いに、思っている以上に緊張しているようだ。しっかりしなければ。

遊戯は息を吐いて、心の中で改めて気合を入れなおした。

ここは船のデッキ。

遊戯はペガサスが開催するデュエリストキングダムに参加したデュエリストが乗る船にいた。

ペガサスによってビデオテープに封じられた双六の魂を開放するた
めに。

杏、本田、そして諸々の事情により仲間となった獺良了は、遊戯を
心配して一緒についてきたのだ。

といってもデュエリトではない彼らは密航して船にいるのだが。

「・・・ねえ、遊戯」

「何、杏」

「本当に城之内のやつ、来るの？」

「来るよ！手紙に書いてたもん」

ほら、と遊戯は胸ポケットから紙切れを取り出した。

紙には汚い文字でたったの3行。

《遊戯へ

すまないが、お前のスターチップを一つ貰うな。

怒ってくれても、酷いと思ってくれてもいいぜ。じゃあな。 城

之内》

遊戯はにこにこ笑って手紙を丁寧に畳んでポケットにしまった。

「遊戯君、嬉しそうだね。スターチップ盗られたわりに」

「うん。僕、別に怒ってないもん。酷いとも思っていない。だって彼
には、DEATH-Tの時いっぱい助けられたもん。だから僕はス
ターチップを盗られたんじゃないくて、彼にそのお礼でスターチップ
をあげたんだよ。――それに、城之内君は理由も無くこんなことす
るとは思えないんだ・・・」

「遊戯・・・。そうだな。あいつとはほんの少しの間一緒に

ただけだけどよ、悪いヤツじゃねえってことだけは確かだもんな」

「本田君・・・」

「そもそもそんな酷でえヤツだったら、あの時助けてくれたりするわけねえしな！」

「へえ・・・僕も早く会いたいなあ、その城之内君に」

緊張高まる船の中、楽しく話をする彼らの元に一つの影。

「やあ、遊戯君」

影の正体は、大会優勝者であるインセクター羽蛾。

「君が海馬くんを倒したカード・・・その幻のカードを見せてくれない？」

「バレてるなら隠す必要もないね・・・ハイ」

遊戯は五枚のカードを羽蛾に手渡した。

ニヤニヤと笑う羽蛾に、何だか嫌な予感がする。

「遊戯くん・・・ボクはずーっとこのカードを倒す戦略を考えていたんだ・・・でもなかなか見つからなくて・・・でもようやく見つけたよ・・・こうすれば良かったんだ！」

そう言って、羽蛾は五枚のカードを海に投げ捨てた。

悲鳴を上げて海に落ちていくカードを見つめる遊戯の横を影が通り過ぎた。

暗い夜にも、その金の髪だけは存在を強く主張するかのように光る。

「「城之内（君）！！」」

城之内は空中でカードを掴むと同時に、大きな水柱をあげて海へと落ちた。

海中で残りの一枚を取ろうと手を伸ばしたが、カードは城之内の手を離れて暗い深海へと落ちていく。

城之内は大きく舌打ちし、カードを追おうと更に深く潜ろうとしたが、強制的な力によって体が海面へと浮上する。

海から顔を出し、星空を映した彼の瞳は、紅く染まっていた。

それはほんの一瞬のことで、彼の瞳はすぐに元の茶色に戻る。

城之内は手にある4枚のカードを胸ポケットに入れて救命具に掴まった。

「城之内！」

「大丈夫か!？」

「無茶するねえ」

船に上がった城之内を杏と本田と獺良が迎える。

心配そうな顔で自分を見る二人に城之内は苦笑を浮かべる。

「平気平気。それより遊戯は？」

「ここだぜ、城之内君」

一足遅れて城之内の元に來た遊戯は、いつもの遊戯とは全く違う雰囲気を醸し出していた。

杏と本田はしまった、と城之内を見る。

突然変貌してしまった遊戯に戸惑ってしまうかもしれないと二人は思ったのだが、城之内は何の疑問も戸惑いも見せず遊戯にカードを手渡していた。

「悪い、遊戯。残り一枚が取れなかった・・・」

「いいんだ城之内君。それより本当に大丈夫かい？」

「平気だって。何回も言わせんなよ」

そう言って城之内笑ったのだが、遊戯は尚も心配気に見つめてくる。城之内は首筋に手を当てて溜息を吐いた。

「・・・着替え持ってきてるからよ、便所で着替えてくるわ」

その瞬間、遊戯の顔が明るくなった。

分かり易いその反応に城之内は遊戯の頭を一撫でし、まだその場にいた羽蛾を睨みつけて部屋へと向かう。

廊下を歩きながら、城之内は手を掲げた。

するとその手に、海へと沈んだはずの『封印されしエクゾディア』のカードが現れる。

「・・・何故、渡さなかった？」

いつの間にか周りを漂っていた黒い靄に問いかければ、靄はまるで親に怒られた子のように萎縮し少し色を薄まったが、すぐに黒くなり城之内の周りを漂い始めた。

城之内はさっきとは比べ物にならない盛大な溜息を吐く。

「祖父の力を借りず、自分の力で乗り越えろと？あいつは譲り受けたんだぞ？エクゾディアこれもあいつの力には変わらないだろう」

靄は城之内の周りをうろうろと漂う。

鬱陶しくなったのか城之内は靄を手で払った。

「わかったわかった。このカードは遊戯には渡さない。それでいいだろ」

靄はそれを聞くと、満足したかのように消えた。
消え去った靄に城之内はカードを見てニヤリと笑う。

「本来の持ち主には、返すけどな」

再会（後書き）

もうすぐデュエル場面が書けると思うとちょっとドキドキ。

ていつても城之内くんの場面しか書かないと思いますけど・・・。

（オイッ）

あらかじめ申しておきますと、城之内くんのデッキは原作とは少し

（？）違います。

少しで済めばいいんですけどね・・・。

開戦

「城之内君。城之内君いい加減に起きてくれ！」

肩を揺さぶられて耳元で大きな声を出されれば、余程熟睡していない限り人の意識は覚めるものだ。

城之内もその例に漏れず、ゆっくりと瞼を持ち上げた。

「……まだ夜じゃん」

「城之内君、喧嘩売ってるなら買うぜ？」

「すまん、遊戯か」

黒いオーラを放つ遊戯に城之内は完全に意識を覚醒させた。そこで己が状態に首を捻る。

「……何で俺本田におぶられてんの？」

「お前な……」

「着替えた後ですぐ寝ちゃったんだよ。しかも島に着いたから起こそうとしても全然起きないし」

「だから仕方なく俺がお前をおぶってんの。りょーかい？」

「……そんなに、寝てたのか？」

「おお、おお。そりゃもう。熟睡っつーか爆睡だぜありゃ。まあ、それだけ疲れてたってことだろ」

「海に飛び込んだしね」

城之内は彼らの話を聞いていないようで、険しい顔をして俯いていた。

「……………思ったより、力が回復してねえってことか」

「ん？何か言ったか？」

「いや、何でも。悪かったな」

城之内は礼を言って本田の背から下りた。

「で、俺たちや一体どこ向かってんだ？」

固まった筋肉を解すように体を動かしながら城之内は問う。

「羽蛾を探しているんだ」

「羽蛾？・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、あの卑怯者か」

「随分間があったわね。あんたもしかして人の顔とか覚えるの苦手？」

「いや、あんまりにもムカつくヤローだったから、あの後5秒で忘却しちゃって・・・・」

「ある意味すごいわ、あんた」

「褒めんなよ。・・・遊戯、どうやらもう探す必要は無えみたいだぜ？」

城之内は遊戯の背後を指差す。

そこには卑しい笑みを浮かべた羽蛾がいた。

「遊戯、お前を最初につぶしておけばあとは楽勝！今ここでお前にデュエルを申し込むよ！」

「望むところだぜ！！」

二人は傍にあったバトルボックスに入る。

そこで城之内はあっ、と大事なことを思い出す。

「本田、ルール教えろ」

「あ、そういやお前聞いてなかったな」

「そうだ。だから教えろ」

「つってもなー。ただデュエルで星を奪い合うだけだ」

「シンプルで分かり易い。どうもありがとよ。後は見て覚える」

遠回しに役に立たないと言われているような気がしてならない本田だった。

「なんだ？お前すでにスターチップは一つか・・・ならスターチップは一つ賭ければいいわけだな！」

「いや・・・2個賭けてもらうぜ！」

「なに！？」

「言ったハズだぜ！お前てはつぶすかつぶされるしかないとな！オレはスターチップひとつと・・・命を賭けるぜ！！」

話を聞いていた城之内の顔がまた険しくなったが、何もせず傍観に徹した。

その瞬間を見ていた本田と杏がほっと胸を撫で下ろしたのも見なかったことにした。

「始めるぞ」

「ああ」

「「デュエル！！」」

開戦（後書き）

新年迎える前に更新したかったのですが・・・間に合わなかった・・・。

皆様あけましておめでとうございます。良いお年を。

初デュエル！vs舞！

「魔降雷！『グレート・モス』撃沈！」

悪魔の雷により燃やされる巨大蛾。

日本チャンピオンの羽蛾に遊戯は見事勝ち抜いた。

「おめでとう、遊戯」

「やったね遊戯！」

「ありがとう、みんな」

ボックスから出てきた遊戯の周りに皆が集まる。

羽蛾は負けたことが信じられないようで、ボックスの中で呆然としている。

「遊戯、行こうぜ。こいつと同じ場所になんて一秒もいたくねえよ」

「ああ、そうしよう」

城之内の酷い発言はスルーして、遊戯たちは森を抜けようと歩き出す。

その時、獏良が思い出したように声を出して、前を歩く城之内の肩を叩いた。

ビクッと、大袈裟なのではというくらい肩を跳ねさせて城之内は獏良を振り返った。

獏良は驚いた顔をしていたが、すぐに笑って手を差し出した。

「お互い自己紹介がまだだったね。僕は獏良了。よろしくね」

「・・・」

「？」

「城之内？」

「どうかしたのか？」

「・・・いや。よろしくな。俺は城之内克也だ」

差し出された手を城之内は握り返す。

浮かべられている笑みが引き攣ったように見えるのは、果たして気のせいなのだろうか。

「みんな、見てくれ」

草原に出た遊戯たちは、沢山のデュエリストたちを発見する。

ある者はデュエル相手を探し、ある者たちはボックスでデュエルしている。

「遊戯君デュエルは順調？」

遊戯と羽蛾のデュエルの途中に現れた孔雀舞も、今し方相手を倒してこちらに話しかけてきた。

ナイスバディでかなりの美人さんに本田など鼻の下が伸びてしまっている。

だが美しい見た目に反して、彼女の目は獲物を狙う狩人の目だ。城之内は思わずぶるりと身震いする。

「今ここでデュエルを申し込む。相手はあなたよ！」

舞は城之内を指差した。

なるほど、彼女は狩りの基本を心得ているようだ。

「ふむ。さてどうしようかねェ。俺は初心者だからなあ。つかこれが初デュエル？」

「えっ、それマジで言ってるの城之内！？だったらやめなさい！」

「そうだぜ城之内！オメェ折角ゆう・・・」

「本田君！そこから先は禁句だぜ」

「おっと悪い。にしたって城之内、やめとけ。初心者が相手するにやあ相手が悪すぎるぜ」

「本田君の言う通りだよ。受けない方がいいよ、城之内君！」

皆は口々に反対するが、城之内はそれを見捨てて遊戯に尋ねた。

「遊戯は？どう思う？」

「俺か？俺は受けたほうがいいと思うぜ城之内君！」

「よし！そのデュエル受けるぜ」

「決まりだね。あたしは孔雀舞」

「俺は城之内克也だ」

「こっちへ来な！」

ボックスに入っていく城之内を遊戯以外のみんなが心配気に見つめる。

「ねえ遊戯」

「ん？」

「城之内、勝てると思う？」

「分からない。確かに舞を相手するのは荷が重いかもしれない・・・でも俺は、城之内君を信じてる。絶対に勝つと」

「遊戯・・・」

「杏たちも城之内君が勝つと信じてほしい。その想いはきっと城之内君に届く！」

「うん！そうだね！」

「おっしゃ！それじゃ俺たちは全力で城之内を応援しようぜ！！」
「うん！」

城之内と舞は席についていたが、まだデュエルはしていない。
どうやら城之内が舞いに待ったをかけたようだ。

「・・・一つ、いいか？」

「何だい？」

「お前は何の為にこの大会に参加したんだ？賞金か？栄光か？」
「両方！」

そう答えた舞は嬉しそうだ。
だが幸せ、とは言い難いと城之内は思った。

「ふーん・・・」

「何よ、自分から訊いてきといてそのどうでもよさげな返事は！
だつたらあんたは何の為に参加したのさ！？」

それは遊戯たちも訊きたかったことだった。
遊戯のスターチップを盗んでまでこの大会に参加した理由。
みんなの視線が自分に集まるのを感じて城之内は微かに苦笑を浮かべた。

「未来のため」

「？」

「あげたいんだよ、未来を・・・」

「誰に？」

「内緒。どうしても知りたいなら俺に勝ってみな！」

「生意気だね、素人」

「素人なりの恐ろしさ、味あわせてやるよ」

「「デュエル！」」

城之内はデッキからカードを取ろうとして、その手をピタリと止めた。

舞を不思議そうに見つめ、きょとりと首を傾げる。

それもその筈。

何故なら舞はデッキから引いたカードを見ず、テーブルに伏せたのだ。

「・・・カード、見なくていいのか？」

「ああ」

「面白い闘い方するな、あんた」

「そうかい？」

「おう。だから俺も真似する」

外が一気に騒がしくなったが城之内は気にせず舞と同じようにデッキから引いたカードを見ないでテーブルに伏せた。

今度は舞が訝しげに城之内を見つめる。

「正気かい？」

「俺はいつでも正気。心配しなくても負けた時の言い訳になんて卑怯なマネしないぜ？」

「あたしに勝ちを譲ってくれるってこと？」

「馬鹿なこと言うんだな、あんた。んなわけないだろ？でもそう思うなら思えばいい。あんたの驕りが自身の敗北に繋がらなきゃいいがな」

「何だって!？」

「別に。そうカリカリすんなよ。怒った顔より笑った顔のが俺は好きだぜ？」

下心も何も無く「好き」と言われて舞は一瞬頬を赤く染めた。

外にいる遊戯と杏も何だか気恥ずかしくなって頬を赤く染め、本田など地面を叩きながら涙した。

こんな状況を作りだした本人といえば、訳も分らず首を傾げていた。

獏良だけはにこにここと笑って、この鈍感め、と呟いた。

「勝利は譲れねえけど先行は譲るよ。どーぞ」

「・・・後悔しても、しらないからね！ドロー！あたしが出すカードは、『ハーピー・レディ1』！山のフィールド適応で攻撃力30%アップ！」

『ハーピー・レディ』

ATK1650

「ターン終了」

「俺のターン」

城之内はやはり引いたカードを見ずにフィールドに出す。

「俺は『暗黒の竜王』を攻撃表示で召喚」

『暗黒の竜王』

ATK1500

「うそっ!？」

本当にカードを見ずにそれが何のカードかを当てた城之内に舞が驚愕の声を上げる。

遊戯たちもそれぞれ声を上げたり目を見開いたり、驚愕の色を表

していた。

「更に装備魔法『ドラゴンの秘宝』を『暗黒の竜王』に装備。ドラゴン族の攻撃力、守備力を300ポイントアップさせる」

『暗黒の竜王』

ATK1500↓1800 DEF800↓1100

『ドラゴンの秘宝』

「バトル! 『暗黒の竜王』で『ハーピー・レディ』を攻撃!」

「ああっ! あたしのハーピーちゃんが・・・!」

舞

LP2000↓1850

「ターンを終了」

「ど、どうして・・・どうやって引いたカードを・・・」

本当にカードを見ずにデュエルを進める城之内に舞は戸惑う。そんな舞の様子に城之内は肩を竦める。

「おかしいことを言うな。あんたも同じことをしてるだろ?」

「そ、それは、そうだけど・・・」

「その卑怯な手をやめてくれるなら、俺もやめるけど?」

「え・・・」

「カード一枚一枚に別々の香水つけてんだろ? 俺、犬並みに鼻が利くからさあ、さっきから臭ってしゃあねーんだ」

舞は愕然と城之内を見つめる。

まさか素人相手にカードの仕掛けを見破られるとは、夢にも思わな

かったのだろう。

遊戯たちもこれには酷く驚いたようだ。

驚愕に目を見開いて城之内を見つめている。

「気付かれるとは思わなかった？」

「・・・」

「で、そのやり方やめてくれるのか？ じゃないと俺もやめねえぞ？」

どうするんだ、と城之内は問う。

舞はしばらく黙ったまま顔を俯かせていたが、やがて息を吐くと諦めたようにテーブルに伏せたカードを手を取った。

城之内も満足そうにカードを手取る。

「じゃあ続きな。こっからは正々堂々、イカサマ無しのマジデュエル！ さあ、お前のターンだぜ、舞！」

「・・・年下の癖に呼び捨てなんて、ホント生意気。——いいよ！ 小細工なんかなくてもあたしが強いってこと、見せてあげる！ あたしのターン！ 手札から『ハーピー・レディ』を召喚！」

『ハーピー・レディ』

ATK1650

「装備魔法『フォロー・ウィンド』を『ハーピー・レディ』に装備！ 更に装備魔法『サイバー・ボンテージ』を発動！ これで『ハーピー・レディ』の攻撃力は合計800ポイントアップ！」

『ハーピー・レディ』

ATK1650↓2450 DEF1400↓1700

『フォロー・ウィンド』

『サイバー・ボンテージ』

「バトル！『ハーピー・レディ』で『暗黒の竜王』を攻撃！」

ハーピーの鋭い爪が、竜王をいとも容易く切り裂いた。

「・・・やるな」

城之内

LP 2000 ↓ 1350

「カードを一枚伏せて、ターンを終了」

「俺のターン、ドロー。俺は『デビル・ドラゴン』を守備表示で召喚」

『デビル・ドラゴン』

DEF 1200

「この瞬間、伏せカードオープン！『誘惑のシャドウ』！このカードは相手モンスターを攻撃表示にする」

『デビル・ドラゴン』

ATK 1500

「げっ。・・・ターン終了」

「あたしのターン。『ハーピー・レディ』で『デビル・ドラゴン』を攻撃！」

城之内

LP 1350 ↓ 400

「ターン終了」

「俺のターン。うーん、どうしようかねえ」

手札を見ながら城之内は戦略を練る。

しかし中々いい案が浮かばないらしく、とても悩んでいる。
そんな城之内を遊戯たちはハラハラと見つめている。

「どうしよう遊戯！城之内のライフが残り400よ！」

「このままじゃあいつ負けちまうぜ！」

「・・・」

城之内は散々悩んだ後、仕方なさそうに肩を竦めた。

「・・・俺は『ベビー・ドラゴン』を召喚」

『ベビー・ドラゴン』

ATK1200

「ターン終了」

「随分かわいらしいモンスター持ってるわね」

「・・・褒め言葉としてとっておく」

「あたしのターン。あたしは魔法カード『万華鏡―華麗なる分身―』
を発動」

ハッピー・レディが一気に三体に増える。

「『万華鏡―華麗なる分身―』を使ったターン攻撃はできない。タ
ーン終了」

「俺のターン・・・」

城之内はデッキに手を乗せ、祈るように目を閉じた。

「城之内……」

「城之内君……」

（城之内君。信じろ、カードを……！）

目を開けた城之内の眼に諦めの色は無く、むしろ今まで以上に強い光が宿っている。

カードを引き、確認した城之内の顔に、笑みが刻まれる。

「勝利の駒が揃った」

「！？」

「俺は『時の魔術師』を発動！こいつが俺の未来を決めるぜ！ルーレットスタート！！」

『時の魔術師』の杖の針が回りだす。

針は段々と速度を緩め、今、止まった。

針が止まったのは、「当たり」。

「『時の魔術師』の効果発動！『タイムマジック』！幾千の時が流れ、『ベビー・ドラゴン』は『千年竜』へと進化する！！」

サウザンド・ドラゴン

『千年竜』

ATK2400

「何よ！そんなモンスターより、あたしのハーピィちゃんの方が……」

「勘違いしているようだから教えてやるよ。『時』の経過は全てのフィールドに影響するぞ？現にほら。お前のモンスターたちは……」

」

城之内は舞のモンスター達を指差した。

そこにはあの美しく華麗な姿は消え、よぼよぼの老婆へと変わり果てたハーピーたち。

『ハーピー・レディ』×3

ATK 2450 ↓ 1300

「あ、あたしのハーピーちゃんたちがよぼよぼに・・・！」

「時が経てば人なんて変わるさもんさ。容姿も性格も。……………」
羨ましいよ」

ぽつりと呟かれた言葉は誰にも聞き取られることなく。

城之内は胸をよぎった暗い気持ちを振り払うように己が僕に命じる。

「いけ！『千年竜』！！『サウザンド・ノーズ・ブレス』！！」

『千年竜』の攻撃が、三体の『ハーピー・レディ』を吹き飛ばす。
舞のライフポイントは、これで0となった。

「やったー！」

「すごいぜ城之内！」

「やったぜ城之内君！」

「よかったね」

城之内は手を振って遊戯たちに応え、負けて落ち込んでいる舞の肩を指でつついた。

「・・・何よ」

「俺が勝ってあんたが負けた理由」

「・・・」

「見えるけど見えないもの」

「？」

「これに正解はない。だからあんたがどんな答えが出すのか、それはあんた次第。早く答え見つけて、そんなでもって笑えよ」

「・・・はっ？」

「言ったら？俺は笑ってる顔が好きなんだよ」

城之内は舞の頭を撫でてボックスを出す。

みんながなんとも微妙な顔をしているのを見て城之内は首を傾げる。

「何だよ？」

「こんの・・・キザ野郎がっ！！！！」

「は？」

首を傾げる城之内の後ろで、舞が頬を染めて顔を俯かせたのを城之内だけは知らない。

初デュエル！VS舞！（後書き）

ちよつとどころかめっちゃ違う城之内のデッキ・・・。

一応説明させていただきますと、うちの城之内が使うデッキは戦士族とドラゴン族モンスターを中心としています。属性は主に闇です。そしてギャンブルデッキです。

一番大事なことですのでもう一回言います。ギャンブルデッキです。

カードは基本的には原作設定です。

真

途中出会った梶木から昼食とスターチップ——つまり勝利した——を貰った遊戯たちは、カードとスターチップを盗まれて島を追い出されようとしていた少年を助けるために犯人を捜していた。だが見つける前に少年は船に乗って島を出て行かされた。

「遊戯！」

ハンカチで口元を隠し、帽子を深く被った子供が草むらから出てきた。

恐らく彼がスターチップとカードを盗んだ犯人だろう。

「小僧！オレとデュエルがしたいのか？」

子供は頷いた。

遊戯は近くにあったボックスを指差し、入っていく。

子供も遊戯の後についてボックスに入った。

「遊戯のやつあっさりデュエルを受けちまいやがった……」

「もしかしたら……遊戯くんはあの子に心当たりがあるのかも」

「ま、当然だわな」

「え、分かるの城之内君？」

「まあな」

「誰なのよ！」

「黙って見とけよ。遊戯が何とかすつだろ」

お互いスターチップを五個賭けてデュエルが開始される。

子供はモンスターを召喚するが、遊戯はいとも容易く倒していく。

「これ以上闘っても無駄だぜ！」

「ちつくしょおお！！」

子供は勝てないと判断し、スターチップを盗んで逃げようとしたが、遊戯に腕を掴まれて逃れられない。

その様子を見ていた城之内は溜息を吐いて言う。

「他人のカードで勝てるほど遊戯は弱くないって、よく解ってるはずだろ？ お前の兄を倒したヤツなんだからな。そうだろ？——モクバ」

「！？」

「やはり、そうなのか・・・」

子供は戸惑って視線をさ迷わせたが、やがて諦めて帽子を取った。城之内の言った通り、子供は海馬瀬人の弟であるモクバだった。

「その様子だと、あの馬鹿まだ起きてねえみたいだな」

「兄様のこと馬鹿にするな！！」

「ハッ、寝坊輔なあいつが悪いんだよ。そもそもお前が何でこんな所にいるだ？ 遊戯に復讐でもしに来たか？」

「違う！」

予想外の答えと声の大きさに城之内の肩がビクリと跳ねた。

「確かに兄様はまだ目を覚ましていない！でも俺は遊戯に復讐しに来たわけじゃないぜ」

モクバは話した。

ペガサスが海馬コーポレーションを狙っていること、この大会の真

の意味、自分の置かれている状況。
自分が知っていることを何もかも全て。

「・・・」

「どうしたんだい、城之内君？」

「いや、ペガサスはそこまでして何を得たいんだろって思ってたさ」

「知るかよ。でもこれだけは言えるぜ！俺は兄様の夢を守らなきゃいけない。兄様の本当の夢は世界中に海馬ランドを建てて、恵まれねえ子供達を楽しませてやることだから！」

だから信じてくれとモクバは言う。

「ならモクバ君・・・あなたも遊戯を信じて！遊戯にスターチップを返してあげて・・・！」

杏の言葉にモクバは頷き、遊戯に全てを託すためにスターチップを渡そうとした。

その時。

「そこまでだ！デュエル以外でのスターチップの受け渡しは違反と見なし失格にするぞ！」

運悪く黒服グラサン野郎に邪魔された。

そしてモクバは捕らえられ、スターチップも取られた。

「待てよ。そんなには遊戯のスターチップもあるんだぜ？返せよ」

城之内が講義すれば、スターチップはデュエルでしか手に入れられないと返された。

肩を竦めてぐっと拳を握った城之内を制して、遊戯が前に出てグラ

サンに指を突きつける。

「だったら貴様にデュエルを申し込むぜ！」

「オレはデュエルはやらんさ……だがどうしても言うなら相手をを用意している！」

言われてバトルボックスを見ると、いつの間にか人が座っていた。

「あれは、海馬！？」

「遊戯、さすがに俺でも海馬に同情するぞ？」

城之内はここにはいない海馬に哀れみを感じながらボックスにいる相手を見る。

遊戯が海馬だと思ったものは人形だ。

腹話術師と言われた男は人形を使って復讐してやるくなどと言いながら遊戯を挑発する。

おっと、思わず強く握り締めたせいで血が。

遊戯の方も怒りで怖い顔になっている。

これはまずいと思い、遊戯を落ち着かせようとしたのだが、その前に遊戯はボックスの中へと入ってしまった。

これは本当にまずいことになった。

「頭に血イ上らせて、勝てる相手ならいいんだが……」

「どういう意味？遊戯が負けるって言うの？」

「いや、なんつか……」

言葉では説明の仕様が無い。

腹話術師のデッキから、あるはずの無い気配を感じる、だなんて。言っちゃって信じやしないだろう。

気のせいであることを願うばかりで。

もし万が一その気配が本物だとしたら、自分も冷静ではいられなくなるだろうから。

腹話術師の人形がカードを引いて確認した瞬間、なんとも嫌な笑みを人形は浮かべた。

「僕は『青眼の白竜』を召喚！」
ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

ああ、気のせいであって欲しかったのに。

バリイイイン！

キラキラと光を反射して、ガラスが飛び散る。

驚いて皆が振り向けば、城之内の拳がボックスの硝子を打ち破っていた。

握りしめられている拳からは血が止めどなく流れるが、城之内はそんなの気にも留めていなかった。

震えているのは痛みからなのか、それとも。

身の内に燃える劫火の如く怒りを表しているのか。

「――お前が・・・」

見る者に恐怖を与えるほどの恐ろしい目が、腹話術師を睨みつける。

「お前風情が！そのカードを使うなッ！！『青眼の白竜』をつかっているのは、この世でただ一人！セト^{あいつ}だけだ！！」

放たられる殺気。

恐怖で声も出ず、動くこともできない遊戯たちは、ただただ城之内を見つめることしかできない。

硝子から拳を引き抜くと、ガラスがまた音を立てて落ちる。

城之内は左手で目元を覆い、怒りを静めるために深呼吸をする。
やがて落ち着いてきたのか、城之内は目から手をどける。

怒りは宿ったままだが、あの恐ろしい目ではなくなっていることに
杏たちはほっと安堵の息を吐いた。

だが身に巣くう殺意や怒りが消えたわけでは無い。

「・・・・・・・・遊戯・・・・・・・・」

名を呼ぶ声が、震えているような気がした。

「勝って・・・・」

今にも泣き出してしまいそうな笑顔。

そんな城之内の顔を見ていたくなくて、遊戯は力強く頷いた。

「任せてくれ城之内君！」

手に入れる！vs竜崎

海馬の魂のカードである『青眼の白竜』で腹話術師に止めを刺した遊戯。

城之内は先程までの殺気立った雰囲気や無表情が嘘のように上機嫌だ。

腹話術師が倒れたからだろうと仲間達は検討付けるが、それは少し間違いだ。

城之内の機嫌が良くなったのは、デュエル中、腹話術師が操っていたブルーアイズが消えた時から。

プレイヤーの指示無く『青眼の白竜』が消えたと言うことは、真の主が目覚ましたということだ。

『青眼の白竜』を真に操ることができるのはこの世で唯一人、海馬瀬人だけ。

やっとパズルのピースが揃ったのだ。

喜ばないわけがない。

しかしその喜びも長くは続かなかった。

デュエルに夢中になっていたあまり、モクバが猿渡に連れて行かれたことに気付かなかったのだ。

とんだ失態に城之内は心から己を恨んだ。

「モクバ君、大丈夫かしら・・・」

「いくら何でも殺しはしないだろう。だがどうなるか・・・」

「・・・気にしても、埒が明かねえよ。無事を確認するためにも、早くペガサス城に行かねえと」

「城之内君の言うとおりで。一刻も早く城へと向かおう」

「とは言うものの・・・」

皆の視線が城之内に集まる。

城之内もまた自分の手に装着しているグローブを見る。
現在城之内が持っているスターチップは二個。
城への道はまだまだ遠そうだ。

「ま、ここでこうしててもしゃーねー。移動しようぜ」

遊戯たちは罰ゲームによって悲鳴を上げる腹話術師を置き去りにしてその場を離れる。

途中何度かデュエリストと擦れ違いはしたのだが、誰も勝負を仕掛けてこなかったし、受けてもくれなかった。

このままで大丈夫なのかと心配をする仲間を他所に、城之内は落着いたものだった。

「城之内君、随分と余裕だね」

「うーん？　そう見えるか？」

「ああ」

「・・・獲物は探すよりも罠に掛かるのを待つ方が得策だ」

「？」

「お前にもあるだろ？　プライドが。高ければ高いやつほど、掛かり易いもんさ」

その時笑った城之内君は正に悪魔のようでした、と後に彼は語る。

「あはははー！　また会ったわね、城之内！」

「ほらな、掛かった」

訂正します。

悪魔のような、ではなく、悪魔そのものでした。

「あんたたちいつも一緒なのね。あんたたちの前世、カルガモの親

子なんじゃない？」

「はいはい、何でもいいから用件言えよ」

「ふん、余裕ぶっついていられるのも今の内よ城之内！あたしの奴隷しもべが今度こそあんたを倒すわよ！」

「ふーん。それより舞、宿題はできたのか？」

「宿題・・・？」

「見えるけど見えないもの。見つけたのか？」

「うっ、うっさいわね！そんなの今はどうだっていいでしょ！！」

怒鳴ってきた舞にまだ見つけていないのだなと、城之内は苦笑する。

「はいはい。つまりその木に隠れてるヤツが、俺と闘うってわけね」

「お久しゅう城之内ハン」

出てきたのは大会準優勝のダイナソー竜崎。

その時、ドクン、と心臓が高鳴った。

胸に手を当てなくとも伝わってくる心音に、城之内の口角が上がる。持っている。あの男は持っている！

己の魂であるあのカードを！

「へえ、誰かと思ったら・・・大会準優勝者の竜崎じゃねーか。相手にとって不足は無えなあ」

「言っとくが、孔雀舞に勝ったからってワイに勝てるなんて思うなよ？」

「上等だぜ」

ニヤツと笑った城之内に遊戯たちと舞はふと疑問を感じた。

どこことなく城之内の雰囲気が変わったように思えるのだ。

例えるなら、遊戯がもう一人の遊戯に変わる時のような感じであろうか。

あんなあからさまなものではないが、それと似たような感じだ。

「城之内君？」

「ん？何だよ遊戯」

「いや、なんというか、その・・・」

「どうしたんだお前？なんか異様にテンション高いぞ？」

「・・・ちよっと、な」

困ったように笑う城之内に皆は納得いかない顔をしたが、竜崎が待ってるからとそれ以上追求できなかった。

ボックスに向かう城之内の背を遊戯はじっと見つめる。

あの時城之内は、本田の言葉に、ほんの一瞬だけ顔を歪めた。

それが一体何を意味していたのか分からない。

本当に一瞬だったから、見間違いだったかもしれない。

だがどうも気のせいとは思えなくて、遊戯はつい考え込んでしまう。傍で声をかける杏たちにすぐに反応できぬくらい。

「遊戯君」

「・・・」

「遊戯！」

「・・・」

「遊戯ってば！」

「・・・あ、何だい？」

「何だじゃないわよ。城之内のデュエル、始まるよ」

「あ、ああ・・・」

こうなったら仕方がない。

後で城之内に訳を聞こうと考え、遊戯はこの件を一時保留にした。訊いて城之内が素直に答えてくれるかは定かではないが。

「荒野フィールド40%、山のフィールドが40%、後の20%が草原や。ワイの恐竜デッキは荒野フィールドでパワーアップするか
ら気をつけや」

「ご忠告どうも。さっさと始めようぜ！」

「「デュエル！」」

LP2000 城之内vs竜崎 LP2000

「先攻はいただくで。ワイは『二頭を持つキング・レックス』を召喚！荒野のフィールド適応でパワーアップや！」

『二頭を持つキング・レックス』

ATK2080

「んじゃ、俺のターンな。俺は『デビル・ドラゴン』を召喚。こっ
ちももちろんパワーアップするぜ」

『デビル・ドラゴン』

ATK1950

「そんな攻撃力じゃワイのモンスターに勝てへんで！」

「まだ終わってねえっつの。魔法カード『ドラゴンの秘宝』を『デ
ビル・ドラゴン』に装備」

『デビル・ドラゴン』

ATK2250

『ドラゴンの秘宝』

「うげっ!?!」

「『『デビル・ドラゴン』で『二頭を持つキング・レックス』を攻撃
！」

竜崎 LP2000↓1830

「カード一枚伏せて終了」

「ワ、ワイのターンや！ワイは『メガザウラー』を召喚や」

『メガザウラー』

ATK2340

「攻撃や！」

城之内 LP2000↓1910

「ふーん」

「なんやそのどうでもよさげな反応！」

「ん、悪い悪い。何か、舞より手応えないなーって思ってたよ」

「何やと〜！」

怒りだした竜崎に城之内はにやりと笑う。

「落ち着きな！冷静さを失ったら勝てる勝負も勝てないよ！」

城之内の作戦に気付いた舞が竜崎を怒鳴る。

ハッとして落ち着きを取り戻した竜崎に城之内はチツと舌を打つ。

「侮れんヤツやなあ、城之内」

「お褒めの言葉どうも。俺のターンな」

デッキからカードを引いた城之内はしばらく悩んだ後、モンスターを守備表示で出してターンを終了した。

「ワイのターンや。『メガザウラー』で攻撃！」

モンスターを破壊されるのを城之内はつまらなさそうに見つめる。

「更に『ワイルド・ラプター』を召喚！」

『ワイルド・ラプター』

ATK1950

「ターン終了や」

「俺のターン」

その声は刺々しかった。

城之内がイライラしているのが見て取れる。

しかし一体何にイライラしているのか遊戯たちには分からなかった。

「・・・ここは一気に・・・いやでも・・・やっぱり・・・」

手札と竜崎を交互に見ながらぶつぶつと呟く城之内。

やがて何かを決心したらしく、睨むように竜崎を見る。

その眼光に竜崎はついビクついてしまう。

「俺は『炎の剣士』を召喚」

『炎の剣士』

ATK2340

「『炎の剣士』で『メガザウラー』に攻撃！」

「相打ち狙いか？甘いで城之内！」

「・・・お前、ホントに準優勝者か？『炎の剣士』は名の通り、炎属性。恐竜族には相性最悪だぜ！」

「何やと!？」

『メガザウラー』に真正面から突っ込んだ『炎の剣士』相打ちで共に倒れるかと思いきや、『メガザウラー』だけが破壊され、『炎の剣士』はフィールドに残った。

「これにてターン終了。さ、どうするんだ？」

「クッ、ワイのターンや！」

引いたカードを確認した竜崎は顔を歪める。
どうやら目的のカードを引けなかったようだ。

「『ワイルド・ラプター』を守備表示に変更。更に『屍を貪る竜』を守備表示で召喚」

『ワイルド・ラプター』

DEF1040

『屍を貪る竜』

DEF1560

「ターン終了や」

「・・・『炎の剣士』で、『屍を貪る竜』を攻撃。これでターンを終了」

「ワイのターン！」

竜崎がカードを引いたその瞬間、城之内の心臓がドクンと脈打った。
竜崎が引き当てたカードにニヤリと笑うのを見て城之内もまた口角

を持ち上げる。

「ワイは『レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜』を召喚や！」

『真紅眼の黒竜』

ATK2400

「『真紅眼の黒竜』だと!?!」

「キャッ! どうしたの遊戯? そんなにあのカード、強いのか?」

「『青眼の白竜』程じゃないが、あれも幻のレアカードだ。まさか竜崎が持っていたとはな・・・」

ああ、でも・・・。

遊戯は確信した。

このデュエルは、城之内の勝利で終わると。

何故そう思ったのか遊戯自身も分からない。

だが分かってしまったのだ。分からないはずがないのだ。

だってあのカードは――。

「?」

遊戯の思考はそこで止まった。

無意識が生み出した一瞬の空白。

その意味を今の遊戯が知る術は無く、遊戯はただ首を傾げるだけだった。

「やれ、レッドアイズ! 『黒炎弾』!」

カッ、と紅い瞳が光り、吐かれた黒き炎が『炎の剣士』を焼き倒した。

城之内 LP1910↓1850

「・・・」

「何や！？ビビッて声も出えへんのか！？降参するなら今のうちやで？」

「・・・誰が」

手札で隠された口元は、見事な弧をえがき、細められた目は上機嫌を隠すことなく煌めいている。

「俺の番だな。手札からモンスターを守備表示で召喚してターンを終了」

「そんな雑魚モンスター！レッドアイズで一発でしまいや！」

レッドアイズの攻撃に城之内のモンスターは破壊される。

竜崎は場に更にモンスターを召喚する。

それに対し城之内は、またモンスターを守備表示で召喚してターンを終了する。

仲間達は、城之内のデュエルを不安な面持ちで見つめる。

「ねえ遊戯、どうにかならないの・・・？」

「・・・」

「このままじゃ城之内の奴、負けちまうぜ！」

「・・・い「いや、それはないよ」

遊戯の言葉を遮って獏良は否定する。

以外の人物からの否定に本田と杏は目を丸くして獏良を見つめる。

「どうしてそう思うの？獏良君」

「それは、なんとなくとしか答えられないけど・・・でも・・・」

猥良はピンチだというのに笑みを浮かべる城之内を見つめたまま言う。

「彼は絶対に負けないよ。だってアレが彼を裏切るわけないもの」

竜崎は思った。

やはりこいつが舞に勝ったのはマグレだと。

そして思い出す。

城之内が如何にして舞に勝ったのかを。

「城之内、知っとるか？ トレーディング・カード・ゲームでは勝者が敗者のカードを一枚貰える規則ルールがある！ ワイが勝ったら、お前の『時の魔術師』を貰うで！」

「なっ!？」

竜崎が城之内につきつけた条件に舞は激怒する。

そんなことされれば、竜崎と闘った時自分が負ける可能性が高くなるのだから。

だが竜崎はそんな舞を無視して続ける。

「そんな代わり、ワイが負けたら『真紅眼の黒竜』をやるわ。どうや？ 悪くない条件やろ？」

その瞬間だ。

城之内が歓喜の声を上げたのは。

杏、本田、竜崎、舞の四人は突然笑い出した城之内に驚いて肩を跳ねさせた。

遊戯と猥良だけは、まるでこうなることが分かっていたかのように

動じていない。

「・・・おい」

「な、なんや」

「今の約束に、嘘はないな？」

「む、むろんや・・・！」

「だったら試そうぜ、竜崎・・・俺かお前、どちらにカードの運命が微笑むのか！！伏せカード発動！『時の魔術師』！」

城之内が発動したのは1ターン目からずっと伏せていたカード。

まるでこの時を待っていたかのように、運命のルーレットは回りだす。

皆が固唾を吞んで見守る中、針がゆっくりと止まる。

「残念だったな」

針が止まったのは「当たり」。

運命が微笑んだのは、城之内だった。

「『時の魔術師』の効果発動！フィールドを幾千の時が流れる！！」

時の経過と共に、フィールドに存在するレッドアイズと他の恐竜族モンスターがボロボロと崩れていく。

肉は無くなり骨となって地面へと埋もれ、竜崎のモンスターは全滅した。

竜崎 LP1830↓0

「ワ、ワイが負けたやとー！！」

外では仲間達と、そして舞が城之内の勝利に喜んでいる。

「それじゃあ約束通りスターチップと」

端に置かれていたスターチップとフィールドに置かれていたカードを手に取る。

「『真紅眼の黒竜』のカードは頂くぜ！」

現在のスターチップ獲得数。

遊戯 6個。

城之内 4個。

手に入れる！VS竜崎（後書き）

キーワード不足に今更気付く私。

でも今更なので増やしません。

そして書いているうちに話の設定を変更している私。
駄目じゃん！

闖う理由

夜。

自然しかない島だけあって星も月も美しく煌いている。
だがそんな美しい夜景を眺める余裕など、彼らにはなかった。

「…………お腹空いた…………」

「あたし、ゆっくりお風呂入りたい」

「こんな遅いんじゃないや誰もデュエルなんかしてないだろうね…………」
「スターチップよりポテトチップ…………」

遊戯が虚ろな目で月を見上げて言う。

空腹で限界のきた仲間達に、傍で黙って見ている城之内は苦笑するしかない。

自分とて腹は減っているが我慢できないほどではない。

「あつ、キノコ…………」

ふと、木の根に生えている茸を猿良が発見する。

赤くて斑点模様のあるそれは、どう見ても毒茸だ。

「…………食ってみようかな」

本田の発言に城之内は座っていたにもかかわらず見事にずっこけた。
そこまでか！？そこまでするほどか！？

「そろそろ限界だな…………」

「何が？」

「何がって…………あの状況を見て分からないか？舞」

背後から現れた舞に驚くことなく平然と城之内は返す。

舞はムツと頬を軽く膨らましてつまらない、と呟いた。

頬が膨れても不細工どころか可愛く見えるのは彼女の美しさ故だろう。

「舞さん!？」

「やっほー。揃いも揃って・・・ひもじい顔してるわネ!・・・こいつ以外は」

舞は悔しそうに口を尖らせてチョコを齧る。

それをおいしそうに見つめる遊戯たちに城之内はまた苦笑を浮かべる。

「ねーえ、城之内君。このチョコ、ナッツがいっぱい入っておいしいわよ。スターチップ一個と一欠けら、交換する気ない？」

「欠片も無いから諦めてくれ」

「そりゃそーよね」

「ああ。ところでお前、何しに来たんだ？まさかからかう為だけに来たのかよ」

「そんなわけないでしょ。どう？夜くらいは一時休戦でことにしない？お互いデュエリスト！休息も必要でしょ！」

舞は持っていた鞆から食料を出した。

分けてくれる代わりに、男共は働かされる。

食糧確保のため、遊戯たちは黙って作業を開始する。

「僕一人暮らしたから、料理は結構できるよ」

「僕は野菜と食器洗ってくるね」

「そいじゃ俺は皮むきでもしようかね」

「じゃあ俺は・・・」待った!

動こうとした城之内に舞はストップを掛けた。

「あんたは何もしなくていいわよ、城之内」

城之内を除いた男達から声が上がったが、舞はそれを無視して続ける。

「その代わり、これに参加した理由教えなさいな」

声はピタリと止んだ。

自分を見つめてくる視線に城之内は苦笑を浮かべる。

「・・・それ、言ったと思うけどな」

「誰のとは言わなかったじゃない」

「お前負けたじゃん」

「それはそれ、これはこれよ。いいから教えなさい」

「断ったら?」

「食事抜きよ。後ろの奴らと一緒にね」

これは痛いところをつかれた。

自分だけならまだしも、遊戯たちが飯抜きというのはさすがにきつい。

後ろを軽く窺ってみれば、射殺しそうな視線とぶつかった。断ったら間違いないタダじゃ済まないだろう。

「・・・飯、食いながらな」

「ダメ。今言うの」

「安心しろ。ちゃんと言うよ」

城之内は立ち上がって森の中へと進んでいく。
どこへ行くの、と尋ねた遊戯に、薪拾いと返して彼は森の中に消えた。

「・・・何であんなこと言っただんですか？」

「あんたたちは気にならないの？あいつが闘う理由」

「そりゃあ・・・」

「未来、なんて重い言葉、そう簡単に口にはできない。なのにあいつは言ったのよ？それをあげたいって。気にならない方がおかしいわよ」

城之内は少しして戻ってきた。

細長い枝からどっから持ってきたんだ言いたくなるような丸太を抱えて。

「こんな暗い中でよくそんなの見つけられたね」

「木、切ってきたから」

「・・・どうやって？」

城之内はにこりと笑うだけだった。

木の枝を集めた後城之内は舞に言われた通り何もせず、寝転んで空を見上げていた。

やがて夕飯ができた頃にちょうど杏がシャワーから出てきて、食事の時間となった。

何故か皆黙々と猥良特性のカレーを食べている。
時には城之内の方に視線を向けて、また食べる。
どこことなく重苦しい沈黙を城之内は突然破った。

「――俺には妹がいてな」

その瞬間、城之内に全ての視線が集まる。

「生まれつき目を患っててよ、ずっと入院生活だ。そんでどうとう医者に最終宣告されちゃった。あいつの目は、最高の医療技術でも治る可能性は五分。それでも可能性があるならって思った。だけど、俺んところは恥ずかしいことながら酷く貧乏でな。んな大金用意できねえ。そこに「決闘者の王国」^{デュエリストキングダム}のことが耳に入ってた。そっからは・・・」

城之内はチラッと遊戯に視線をやり、肩を竦めて立ち上がった。

「それじゃあみなさま、おやすみなさいませー」

軽くふざけた物言いですう言うのと、城之内は早々とその場を離れた。そして、先程とは比にならない重苦しい空気が場を支配する。

「・・・嘘、なんてとても思えないね・・・」

「嘘なもんかよ！あいつは本当に妹のためにこの大会に参加してんだ！チクショー！」

「本田君、涙がすごい出てる。・・・城之内君も、遊戯君と同じで背負ってるんだね」

「うん・・・僕、城之内君には絶対に決戦に残ってほしい。妹さんのためにも、城之内君のために・・・」

「大丈夫よ遊戯。あいつ初心者だけど強いもの！なんたってあの竜崎を倒したんだから！」

「そうね。あたしも負かされちゃったし」

「あ、いや、その・・・」

「いいのよ別に。事実だしね」

「うゝ」

段々と明るくなってきた雰囲気、
離れて様子を窺っていた城之内
はそっと微笑んだ。

それぞれの想い

「俺だったら捨てないぜ、夢も星も」

妹のためならと、遊戯からスターチップを盗んだ。

その事に後悔はしていないが、心は酷く痛んだ。

『あいつ』の想いを、遊戯たちとの絆を、利用したような気がして、いや違う。利用した気じゃない。間違いなく利用したんだ。

どんなに謝ったって許されることじゃない。

それでも折角掴んだチャンスを逃す気は無い。

お前だってそうだろう、舞？

「じゃ、俺はもう寝るぜ」

寝よう。

闇へと意識を堕として、改めて『あいつ』に謝ろう。

遊戯たちに言えない分も纏めていっしょに。

俺と違って優しい『あいつ』はきつと、笑って許しの言葉を吐くのだろうけど。

十
十
十

ポチャンと滴の落ちる音と、チャリと金属の擦れる音に瞼を持ち上げる。

聞かないこの世界に、まるで同化するように黒を纏ったそいつは

俺を見下ろして笑っていた。

「闇が嫌いな克也君。お前がここに墮^くちるなんて珍しいな」

軽く首を捻ってそいつはくつくつと笑う。

そいつが少し肩を揺らしただけで、幾重にも巻きついている鎖が音をたてる。

俺の左腕に巻きついている鎖も、繋がっているために振動が伝って僅かに揺れる。

「・・・謝ろうと、思ってな・・・」

「・・・お人好しだな、克也。俺が前に言ったことを忘れたか？」

俺は首を横に振る。

忘れるわけがない。

残酷で優しい、酷い言葉を。

「・・・ちゃんと覚えてるさ」

「だったら謝る必要はないだろう？利用していいと言ったのは俺なんだからな」

「俺を生かすことが利用か・・・誰が見ても、そうは思わないだろうけどな・・・」

「本当にお人好しだなお前は」

どっちがだ。

口には出さずに心の内で吐き捨てる。

このまま続けば堂々巡りになって、誤魔化されるのが落ちだからな。

「本当に、すまねえ」

「・・・」

「お前だけじゃなくて、遊戯たちや、遊戯たちとお前との絆まで利用して・・・本当にすまねえ」

「・・・克也、そんなことで心を痛めるな。前に進めなくなるぞ？それにお前は悪くない。だからこれ以上は言うな。さすがに怒るぞ？」

ふっと優しい笑みで見つめられて、それ以上は何も言えなくなった。予想通りに、お前は簡単に俺を許したな。

重い運命を背負っているお前にとって、俺という存在は枷でしかないというのに。

つい溜息をこぼしてしまった俺に、そいつはきょとりと首を傾げた。

「俺は寝るよ」

「そうか」

「日が昇るまで起きるつもりはねえから、好きにすればいい。遊戯の持っているあの野郎のカードが、騒いでしょうがねえ。はっきり言っとうぜえ」

「・・・」

「会いたいんだろ？見たいんだろ？あいつを、あいつの傍らにいる存在を」

「・・・」

「俺はあいつのこと好かねーから、ちようどいい」

「・・・克也」

「んだよ？」

「ありがと」

「・・・おやすみ」

目を閉じる。

すると俺の意識は俺の意思を無視して闇に吞まれていくこの瞬間が、俺はすごく嫌いだ。

でもそれが少しでもあいつのためになるのだと思えば、いくらだつて我慢できる。

自由を失くした魂に、早く安楽が訪れればいい。

十十十

ちょうど意識が浮上してきた時に、バリバリという煩い音にビクリして飛び起きた。

さすがにこの音の中では眠れないようで――余程凶太い神経を持っているヤツなら話は別だが――遊戯たちも耳を押さえて起きだす。テントで寝ていた杏や舞も出てきた。

音の発生源であるヘリコプターが着地するのを見て、思わず溜息を吐いた。

「おっせーよ」

お寝坊な上に遅刻とは、貴公子と言われている割には礼儀がなっていない。

「海馬君！」

ヘリから降りた海馬に遊戯は緊張しながら声を掛けた。

城を睨みつけるように見ていた海馬は遊戯の声に反応してこちらを振り向いた。

「また会えたな・・・遊戯・・・」

「・・・うん！」

遊戯は腹話術師から取り返していたカードを海馬に返した。
手渡された瞬間に、カードが歓喜の声を上げる。
誰にも聞こえない、透明で純粋な声だ。

「とりあえず礼は言っておく・・・。だが勘違いはするな、遊戯。
俺は負けたままおめおめと引き下がる男ではない。いずれお前を倒す」

持ち主はカードたちに似ず素直じゃねーけどな。

「・・・素直じゃねえ」

そうボソツと呟くと、海馬がこっちを見たので驚いた。
え、もしかして聞こえてた？
だとしたらすっげー地獄耳だ。

「何だ、貴様もいたのか」

ハッ、と鼻で笑う海馬。

「・・・あの薄気味悪い笑顔と喋り方やめたんだな海馬。良かった良かった。マジ気味悪かったからよ」

とりあえずにつこり笑って返答した。

海馬の額に青筋が僅かに浮かんだけど知ったこっちゃねえ。

先に仕掛けてきたのはあいつなんだからな。

それに、利用させてもらうにはちょうどいいしな。

「・・・本人を前によくそんな堂々と・・・驕がなってないな」
「カード返してもらっておいで素直に礼も言えないヤツに言われたかねえ」

海馬は眉をこれでもかと吊り上げて睨みつけてくる。

傍にいた遊戯たちはいつの間にか俺たちから距離を置いていた。

「叩き潰してやろうか」

「弱い者苛めなんてサイテーだぜ」

なんか背後からすっげー痛い視線感じるけど無視だ無視。

「言ってくれるわ雑魚が！ならば俺とお前の力の差というものを存分に知らしめてくれるわ！」

「それっぽいこと言って遊戯に負けたこと忘れたのか海馬！？驕りは身を滅ぼすぜ！」

「御託は俺に勝ってから言え！これを装着しろ！」

海馬は持っていたケースから丸い機械を俺に投げ渡した。

キャッチできなかったらどうするつもりだったんだ。

「これはデュエル・ディスクだ。海馬コーポレーションがDEATH H-Tと同時進行で開発を進めていたニューハードだ。まだ試作段階ではあるが、肩慣らしにはいい機会だ」

・・・ホントに、キャッチできなかったらどうするつもりだったんだろうな。

「ルールはM & a m p; Wそのまま。腕に装着したデッキ・ホルダーに40枚のカードを収めろ」

言われた通りにデッキをホルダーに収める。

そんでお互い距離を置く。

これでゲームの準備は整った。

「いくぞ！ゲームスタートだ！俺が先攻を取らせてもらうぞ！」

「見本見せなきゃいけないんだから当たり前だろ」

「黙れ！デッキから5枚のカードを引き、バトルに使うカードをデュエル・ディスクにセット！そしてディスクをフィールドに投げる！」

海馬の手からディスクが投げられ、回転する。

すると、デュエル・ディスクからモンスターが出てきた。

とても鮮明な映像だ。

「カードの画像データをデュエル・ディスクに内蔵させたハイパー・3Dエンジンで高速処理、V？エミュレーターでモンスターをソリッド・ビジョン化させるのだ！」

「・・・あっぱれ、KCの技術力。と、お前の頭脳」

「フン、これぐらいできて当然だ」

海馬は事も無げに言う。

それは驕りからではなく、絶対的な自信からくるものだ。

おまえのそういうところ、嫌いじゃないよ。

「俺は『ミノタウルス』に『巨大化』のカードを装備！」

『ミノタウルス』

ATK1700↓2040

『巨大化』

「これでターンを終了だ」
「・・・」

何で手札の『青眼の白竜』を出さないんだとは思わない。
あいつにとって俺はただの遊戯の付属物だ。

そんなヤツに『青眼の白竜』を出す必要なんてないよな。
でも残念ながら、俺には出してもらわないと困るんだよ海馬。

「俺は手札から、『真紅眼の黒竜』を召喚するぜ！」

海馬の真似して思いっきりディスクを投げた。

そのまま海馬に当たらないかなとちょっと期待したけど、距離が空いててやっぱり無理だった。

『真紅眼の黒竜』

ATK2400

「『ミノタウルス』に攻撃！」

海馬 LP2000↓1640

「カード二枚伏せてターンエンド！」

「・・・」

「海馬？」

終了宣言しても何の行動も移さない海馬を不思議に思っで見つめる。
海馬はどこかに意識を飛ばしたかのように、じっと俺と『真紅眼の黒竜』をその目に映していた。

チラッと後ろを振り返ってみれば、遊戯と獏良も海馬と同じように

こっちを見ていた。
まだだ。

彼らが知るには、思い出すには、まだ早い。

「・・・どうしたんだ、海馬。『真紅眼の黒竜』に恐れをなしてビッたのかよ!」

「!誰がだっ!!」

そうだ。それでいい。

「その時」がくるまで、今は自分達の戦いをすればいい。

「雑魚にしてはマシなカードを持っていたみたいだが、所詮俺の敵ではないわ!」

くるか!

「『青眼の白竜』を召喚!」

『青眼の白竜』

ATK3000

まるで海馬を護るように海馬の傍に立つブルーアイズ。

白竜と黒竜が、敵意を剥き出しに咆哮を上げる。

「覚悟しろ。貴様のガラス細工の自信を粉碎し、跡形もなく消し去つてくれる!」

「俺がそんな繊細に見えんのか!?上等だぜ!こいよ!!」

「やれブルーアイズ!『滅びのバーストストリーム』!」

ブルーアイズの口から白い閃光が放たれる。

レッドアイズも迎え撃つように黒き炎を吐き出した。

白と黒がぶつかり、爆発をうむ。

同時に、レッドアイズもブルーアイズもフィールドから姿を消した。

「馬鹿な・・・何故・・・」

「・・・伏せカード、『闇竜族の爪』発動。このカードの効果により、レッドアイズの攻撃力は600ポイントアップする。よって相打ちだ」

「くっ、ならば・・・」

「「『死者蘇生』を発動!」」

海馬は手札から、城之内は伏せたカードをオープンにし、同じカードを発動する。

黒と白の竜が、再びフィールドに現れる。

ただのソリット・ビジョンのはずだというのに、二匹はグルルと唸り声を上げて互いを威嚇し、護るように主人の体を包み込んでいる。

「くっ・・・」

「こえー顔でんな睨むなよ。もう終わるんだから」
「？」

そう、終わりだ。

俺が見たかったものは見れた。十分だ。

俺はゆっくりとデッキに手を置いた。

「サレンダー」

背後から悲鳴に似た驚愕の声が上がった。
ついでに海馬の顔が更に怖くなった。

「・・・どういうつもりだ貴様」

「これ以上やる意味は無いつてこと」

「どういうことだ！」

「見たかったものは見れた。それに、勝敗はとっくに決まってるんだ」

この勝負で、ブルーアイズとレッドアイズは相打った。

だが「その時」がきた時。

そこに生き残るのは――。

「お前はさっさとお前のやるべきことを果たせよ。いつまで最後の心ピースの欠片を埋めない気だ？」

そんなんじや駄目なんだよ。

不完全なお前じゃまだ役目を果たせない。
だから早く取り返せ。

「これ以上待たしてほしくはないんだ」

傍らに控えるレッドアイズを城之内はまるで宥めるように撫でる。
遊戯たちは一瞬我が目を疑った。

レッドアイズが気持ちよさ気に目を細めたように見えたのだ。

「終わったんだからブルーアイズ仕舞えよ」

「・・・戻れ、ブルーアイズ」

納得のいかないまま、海馬はブルーアイズをカードに戻した。

モンスターが意思を持ってカードに戻る。

その意味をあいっはちゃんと解っているのだろうか。

きつと無意識の行動に過ぎないのだろう。

「海馬」

「何だこの負け犬が」

「ひっでえの」

「どんな理由であれ、負けは負けだ。否、勝負を捨てた貴様など敗者と名乗る資格もない！」

克也が起きた時何と言って落ち着かせたらいいだろう。

「何よ・・・あんたなんか何が分かるっていうのよ・・・！城之内が何を背負って必死に闘ってるか、知りもしないくせに勝手なことを言わないで！」

「そうだよ！城之内君は妹さんの目を・・・」

「猥良！それ以上言うんじゃない！」

「・・・！城之内君・・・」

克也のプライドのためにも、さすがにこれ以上は言わしちやいけない。

だが少し遅かったようだ。

「それがどうした。闘う理由や信念なら、どんな弱小決闘者の胸にも秘められてるだろうさ。重要なのは、それに押し潰されるか、それを守り抜けるかだ」

ああ、本当にキツイお言葉。

間違っちゃいねーけどそんな態度だから誤解がうまれるんだぞ。

それに、そんなこと克也も俺も、十分理解してるさ。

「海馬君！君は、何も変わってないの？あの時のままなの？」

「遊戯・・・俺がお人好しに貴様らと仲良く手を取り合えば満足か

？・・・笑わせるな。今でも貴様らの友情ごっこには虫酸が走るわ！」

それでこそ海馬。

もしここで手をとるなんて言ったら鳥肌どころの騒ぎじゃ済まされなかったぜ。

なんせ想像しただけなのに俺の腕は鳥肌立ってるんだからな。

「遊戯、あの城を見る。ペガサス城を。あの城に奴はいる。ペガサス・J・クロフォード、底知れぬ強さを秘めた男だ。俺は過去に一度だけ、奴の決闘を見たことがある。いや、果たしてそれが決闘と呼べるものなのか。奴は闘わずして勝ったのだ」

昔、ニューヨークであつたM&Amp;Wの大会で何度も優勝していたバンデット・キースが、ペガサスに挑戦した。

ペガサスは直前までM&Amp;Wを教えていた子供にメモを渡してキースと対戦させた。

その子はペガサスのメモ通りに闘い、勝ったという。

「ペガサスの書いた紙には、キースの戦術の全てとその対処法が書かれていた。何と奴は初心者の子どもに勝たせることによって、大会をM&Amp;Wのコマーシャルに仕立て上げてしまったのだ」

ペガサスは千年眼の所持者だ。

心を見ることに長けているあの力を使えば、そんなこと造作もない。

「奴がテーブル越しにどんなトリックを使ったかは分からない。だが、このデュエル・ディスクで勝負を挑めば勝てる可能性はある」

残念ながらそれは無えよ、海馬。

心を読まれる限り、闘い方を変えても結果は同じだ。

まあ、少しは有利になるかもしれないけどな。

「遊戯、俺はペガサス城に乗り込む。失いかけたものを取り戻すために」

その言葉を聞いたと同時に、城之内は笑い、遊戯の人格が変わった。

「海馬。お前と同様、オレ達にも失うことのできない大切なものがある。必ずそいつを守り抜くぜ」

一呼吸置いて遊戯は告げる。

「ペガサスは、オレが倒す」

海馬が微かに笑んだ。

コートの裾を翻して俺達に背を向ける。

「ならばこう言い換えよう。一足先にペガサス城に乗り込むとな」

そう言って真っ直ぐに城へと歩き出した。

「ご武運を。――瀬人様」

傍にいた遊戯たちに聞き取られないように、小さく小さく、城之内は呟いた。

それぞれの想い（後書き）

丸いデュエル・ディスクのルールが何回読んでも分かりません。
単に私が馬鹿なだけなんですけどね。

原作設定だから装備カードも相手ターンのバトルフェイズで発動してもいいはず。多分・・・。

・・・丸いデュエル・ディスクは伏せカードできましたっけ？

今更でも不足分のキーワードは書いた方がいいのかな？

視えぬ存在

空には雲ひとつなく、輝く太陽の下、遊戯たちを取り囲む空気は、非常に悪かった。

その中に舞の姿はない。

テントと彼らの分の食料を置いて黙って立ち去ったのだ。

遊戯たちは今この時だけ、単独で行動する舞を心の底から羨んだ。

遊戯たちは（一名除く）顔を青くさせながら後ろにちらちらと視線をやる。

「殺す・・・マジで殺す・・・撲殺絞殺射殺・・・ぶっ殺す・・・」

メンバーの士気低下の原因である城之内は、ビクビクと怯える彼らの心情など知りもせず、据わった目で地面を睨みながらぶつぶつと誰かさんの殺害計画を呟いていた。

はつきり言って傍に近付きたくないくらい不気味である。

というより一緒にいたくない。

「（ちょっと！何で城之内あんな不機嫌なのよ！夜中の時は気にしてまっせんて態度だったのに！）」

「（知るかよ！）」

「（あはは、今にも呪い殺しそうだね）」

「（それだったらどれだけマシか・・・）」

彼は絶対にそんな生ぬるく曖昧な殺し方はしない。

彼なら徹底的に、そして確実に相手の息の根を止める方法をとるだろう。

短い付き合いだがはつきりと断言できる。とてもいらない自信だ。

「おい」

急に声を掛けられて遊戯たちはビックリして肩を跳ねさせた。
まさかそんなに驚くとは思わなかった城之内はぱちぱちと目を瞬かせる。

「・・・驚きすぎだろ、お前ら」

「ご、ごめん、城之内君・・・」

「まあ、いいけどよ」

さっきまでの不機嫌さはどこへいったのか、城之内は遊戯たちにくりと笑いかける。

遊戯たちは切り替え早いなとは思ったが、口には出さずに苦笑した。
万が一それを口に出して、また機嫌を損ねられたら堪らないからだ。

「遊戯のスターチップは六つ、俺は四つ。船に乗せられていた奴らやプレイヤーキラーのこと考えると、残ってるのは半分以下ってところか？」

ヤベーなこりゃあ、と言いながらも城之内から焦りを感じない。むしろ余裕だ。

「城之内君、余裕だね」

「ん？ そんなわけねえだろ遊戯。めっちゃ焦ってるぜ」

「だったらそれ相応の態度取りなさいよ・・・」

溜息交じりの杏の言葉に城之内はきょとんと首を傾げ、ニヤリと質の悪そうな笑みを浮かべた。

それは正に舞が竜崎を連れてリベンジしてきた時に見せたのと同じ笑みだ。

「大丈夫だぜ、杏」

「？」

「この島の奴らにとったら、俺は初心者雑魚なんだからよ」

何故か自慢げに言った城之内に全員から胡散臭い視線が向けられる。じくっと見つめてくる遊戯たちに城之内は思わず数歩下がった。

「な、何だよ・・・」

「君が雑魚、ねえ」

「俺は初心者だぞ！そう考えるのが当たり前だろうが！！」

「まあ、そうなんだろうけどね・・・」

尚も見つめてくる遊戯たちの視線に耐え切れなくなったのか、城之内は猛ダッシュで遊戯たちから離れた。

まさかそんな行動に出るとは思わなかった遊戯たちは数秒呆けた後、すぐに城之内の後を追った。

彼らは知らない。

その様子を遠くから見ていた影たちがいたことを。

十
十
十

遊戯たちから離れた城之内は、後ろに誰も追ってきていないのを確認して速度を緩める。

まだ結構距離はあるが、確実にこちらに近付いてくる四つの気配。そのうち二つは、先程崖の上で自分達の様子を見ていた者たちのも

のだ。

城之内は気付いていた。

自分達を見ていた狩人の存在を。

だからこそ遊戯たちから離れたのだ。

折角初心者という自分^{エサ}を撒いても、強者^{ゆうぎ}が一緒にいては捕まるものも捕まらない。

あの獲物たちは、ちょうどいいストレス発散になる。

それには悪いが、遊戯の存在は邪魔なのだ。

「いた！兄貴、あそこですぜ！」

「おし、テメェら。目的の場所にそいつ引っ張れ」

現れた四人の男達を城之内は物珍しげに見る。

まさか自分達以外にもこんな大勢で行動しているやつらがいたとは思わなかったのだ。

そして、兄貴と言われ、慣れたように命令を下したところから、あのアメリカの国旗柄のバンダナをしているのがリーダー格のようだ。などと考えていたら両腕を捕まえられて城之内は無理やり移動させられていた。

それも逃亡防止のためか、かなり強く掴まれている。

痛いなあ、と思いつながら城之内は大人しく引きずられていたが、ふと感じた気配に思わず地に足をつけてしまった。

増えた重みに、城之内を運んでいた二人は足を止めた。

「何だこいつ。今までおとなしくしてやがったのに・・・」

「どうでもいいだろう。さっさと運ぼうぜ」

ずるずると引きずられていくにつれて濃くなる気配。

明るかった場所から段々と離されていき、光の届かない暗い洞窟へ。そして己に纏わりつく、黒く淀んだ存在たち。

頭に浮かんでくる映像に吐き気が起こる。

霞む視界に沈みかける意識。

それでもなんとか保っていられるのは、『あいつ』を出さない、ただその一心のみ。

こんな所に、『あいつ』を出しちゃいけない。

奥底から響く声を見殺ししても。

「おら！座れ！」

ボックスに着くと、男達は乱暴に城之内を座らせる。

城之内は荒く息をしながら、目の前に座るゾンビのような少年――骨塚を睨みつける。

少年は何かを言っているようだが、生憎今の城之内には聞こえない。まるで逃がさないかのように周りを囲む彼らの声が、雑音ノイズとなって城之内の聴覚を奪う。

あまりのうるささに耳を塞ぎたくなるくらいだ。

「・・・一つ訊く」

「何だ？」

「このフィールドを使うと言ったのは、お前か？」

城之内はバンダナ男――キースを睨みあげる。

城之内の視線を受け、キースはニヤリと笑う。

「それがどうしたってんだよ、チキン野郎」

「そうか・・・」

お前達には見えまい。お前達には聴こえまい。

地縛霊となって怨霊となった、哀れで醜いヤツらの姿を。

殺意を怨念を嘆きを撒き散らす聲を。

「こいよ。ぶっ潰してやるから」

死念が渦巻く処に行くのは、まだ先の話だ。

見えぬ存在（後書き）

久しぶりすぎる更新。
しかも短い。反省。

挟られる心

おかしい。

城之内と骨塚のデュエルを見ていたキースが思ったのはそれだった。骨塚のフィールドには、三体の不死身のゾンビモンスターとアンデットに力を与えるカボチャの王が一体に伏せカード『守備封じ』と永続魔法『リビング・デットの呼び声』。

対して城之内のフィールドにはモンスターも伏せカードも無い。ライフポイントも骨塚の方が上だ。

今の城之内の立場は絶体絶命と言っている。

だというのに、キースは言い知れぬ悪寒を感じていた。

それは長年培った、勝負師としての勘が、感じたものかもしれない。山札から取ったカードを手札に加えた城之内は、闇に浮かぶ訝しげな、どこか不安を縋い交ぜにしたキースの顔にクスリと笑む。

「勝負に世界では当たり前のことだけどよ、攻撃が全てじゃないんだぜ？」

城之内は手札から一枚のカードをフィールドに出す。

魔法カード『右手に盾を 左手に剣を』。

それは今の形勢を引っ繰り返すことができるカード。

「このカードの効果により、このターン、フィールドに存在する全モンスターの攻守は入れ替わる！」

意志も知能も持たない、攻撃しかできないゾンビモンスターに、守るという考えは存在しない。

よって守備力は0。

それが入れ替わるということは、ゾンビモンスターの攻撃力は無く

なる。

「お、俺のモンスターが・・・」

「さてさて。お前らには色々とお楽しみさせてもらったから、礼代わりに俺の切り札で止めさしてやるよ」

カードが置かれ、フィールドに召喚されたのは、漆黒の竜。

血のような紅の眼が、倒す獲物を見つめ細まる。

「終わりだな、哀れなお人形ちゃん」

黒竜の口から、黒い炎の塊が吐き出され、『ドラゴン・ゾンビ』を焼き払う。

骨塚のライフポイントが、0の数字を刻む。

「城之内君！」

城之内が勝利すると同時に、城之内を探していた遊戯たちが駆け寄ってきた。

城之内は骨塚のスターチップを手に取り、遊戯たちに笑いかける。

「よっ、みんな。わざわざ探させちまって悪かったな」

「本当だよ、もう。大丈夫だった？」

「平気平気。ほら、ちゃんと勝っただろ？」

証拠だといわんばかりに城之内は拳を広げてスターチップを見せる。

「けっ、行くぜ・・・」

その場を去ろうとするキースたちに遊戯たちが気付いて止めようし

たが、城之内に止められる。

「城之内君、何で・・・」

「遊戯、みんな、いいんだよ。あいつは、俺がちゃんと倒すから。だから今は見逃してやろうぜ」

城之内のその言葉に、キースは歩みを止めて振り返った。

サングラスをかけていて遊戯たちには見えないが、その眼にはしっかりと怒りが浮かんでいる。

「見逃してやるだあ？何様のつもりだテメェ」

「おやおや、落ちぶれ賞金稼ぎさんにも、プライドというものはちゃんとあるらしい」

怒りの形相で睨みつけてくるキースに城之内は笑って返す。

しかしその目はカケラも笑っていない。

「勘違いすんなよキース。今すぐぶちのめしたいほどキレてんのは俺の方なんだよ。それをデュエルで返してやるつってんだ。感謝してもらいたいほどだぜ」

「言うじゃねえか若僧があ！これを見ても、お前が俺に本気で勝てると思ってんのかあ！！」

キースがベストを開くと、そこには沢山のデッキがポケットに納められていた。

それを見た遊戯たちが一斉に声を上げるが、キースをそれを一笑する。

そして笑い声を上げながら去っていくキースの背に城之内と遊戯は言う。

「そのちゃんなプライドが、いつまで通じるか、見ものだなキース！」

「キース、この島では決闘者のプライドがルールだ！覚えておくんだな・・・」

「笑わせんな、ガキ共が」

嘲笑いを浮かべて今度こそキースたちは立ち去った。

キースたちが消えた闇をしばし見ていた城之内は、見えなくなった背中に嗤って、遊戯たちを振り返った。

「さて、俺たちもここから出るとするか」

「そうだな」

遊戯たちも移動を開始する。

歩きながらスターチップを嵌めていく城之内は、眉を顰めて忙しく視線を動かす。

相変わらず自分に纏わりつく存在たちに、城之内は嫌気が差してきた。

さつきよりは気分はマシになったものの、好調とは言い難い。

そんな中、救いがあるとすれば、それは遊戯たちにはこの存在たちは視えていないことだろうか。

いや、もしかしたら今の遊戯には、視えないにしても気配は感じているかもしれない。

今ならこの存在たちを薙ぎ払えることができるのだが、遊戯がいてはそれもできない。

それに、今は成りを潜めているが、バクラもいる。

無闇に力を使うのは危険だ。

「おい、城之内！どこ行ってんだよ！」

溜息を吐いて、遊戯たちとは別の道に進む城之内に本田が呼びかける。

城之内は不思議そうにきょとんと首を傾げる。

「お前らこそ、何でそっちの道に行くんだ？」

「何でって、こっちが洞窟の出口だからに・・・」

「ああ・・・止めとけ止めとけ。時間の無駄になるだけだから」

「・・・どうということ？」

「ああいう卑怯者は、最後の最後まで卑怯者なんだよ」

言葉の意味が分からず顔を顰める遊戯たちに城之内は苦笑して教える。

「つまりだ、もうそっちの出口は無えってこと。今頃あいつらの手で塞がれてるさ」

「ええっ!？」

「マジかよそれ!」

「だから言ってるんだろ。卑怯者だって」

「でも、本当に塞がれてるとは限らないんじゃない・・・」

「うーん? 行きたいなら別にそれでいいけど」

行くの、と首を傾げて問いかけてくる城之内に遊戯たちは困惑する。彼の言葉を完全に疑うわけではないが、どうにも信じられない。迷っている遊戯たちに、城之内は仕方ないとばかりに肩を疎める。

「じゃあ、良い事教えてやるよ。この先に、人がいるぜ」

「・・・何でそんなことが分かるのよ」

「キースたちに浚われてる途中でチラッとな」

嘘だ。

本当はさっきから纏わり吐く存在とは別の聲がうるさく教えてくれるのだ。

こんなこと、彼らが真実が知る時まで教えられることではないけれど。

「そいつらに助け求めなかったのかよ」

「仲間かと思ったんだよ。なあ、行こうぜ。俺と遊戯のスターチップ、どうせまだ集めなきゃいけないんだからさ。出口探しついでにそいつらも倒して星奪おうぜ」

「しかし・・・」

「遊戯」

子どものように駄々を捏ねだした城之内に遊戯は苦笑を浮かべ、仕方なさそうに了承した。

途端に城之内は機嫌良く歩き出した。

杏は不安になって遊戯にこそっと耳打ちする。

「ねえ、いいの遊戯？もし出口が塞がれてなかったり、人がいなかったら、それこそ無駄足よ」

「でも、また城之内君の機嫌を損ねたくはないぜ」

その言葉に杏はこれ以上何も言えなくなった。

確かに、今朝の不機嫌をまた再現されるのはごめんだ。

杏は仕方なく肩を竦めて先に行く城之内の後を追う。

舞から貰ったランタンの明かりを頼りに進んで行く内、遊戯たちは洞窟の変化に気付く。

「道が 段々狭くなってる気がするぜ・・・」

「この壁面 さっきまではゴツゴツしてたのによ・・・平面にならされた人工的な壁になってねーか・・・？」

「何だか迷路みたい」

それでも遊戯たちは進んでいき、やっと迷路を抜ける。

抜けた先には、『迷宮』を書かれた広間で、中心には机が置かれている。

「「ん！」」

城之内と遊戯が人の気配を感じたと同時に、二人の男が大きく飛んで現れた。

顔はそっくりで、額にそれぞれ『迷』『宮』が書かれている。

「「我ら 地下ダンジョンの番人——迷宮兄弟！」」

「はぁ、電球兄弟」

ぶふっ、と誰かが噴き出した。

「違う！迷宮兄弟だ！！」

「分かった分かった。ピカピカ兄弟な」

「迷宮兄弟だ！！」

「うっせえなぁ。喚くなよ、河童の皿兄弟」

「貴様いい加減にしろよ！！」

「で、お宅ら一体何なの？ツルツル兄弟」

「貴様ッ、我らを愚弄してそんなにおもしろいか！！」

「いい歳した大人が泣くなよ。情けないぞツルピカリン兄弟」

「そうしたのはお前だろうが！！」

「もういい加減黙れよハゲ共」

「「ぐはっ！！」」

ハゲ・・・失礼。迷宮兄弟の心を抉りに抉りまくった城之内は、と

うとう血反吐を吐いて蹲った二人を見て満足したように息を吐いた。黙って事の成り行きを見ていた遊戯たちはというと、腹を押さえて酸欠状態になっている。

城之内は中々回復しない迷宮兄弟に舌打ちして、無理矢理先を促す事にした。

そうでなければ、話が進まないからだ。

「お前ら、プレイヤー・キラーか？」

城之内のその言葉に、迷宮兄弟はニヤリと笑って起き上がった。

「迷い人達よ・・・我に問うか？正しき道を――」

「正しき道を――」

「「ならばその答――決闘に勝利して得よ！」」

迷宮兄弟は置かれているテーブルを指差す。

あれが、決戦の場のようだ。

「その奥には二つの扉がある!!」

「決闘者二名 前に出よ！」

「二人だど?・・・ダッグ戦か」

「我らに勝利すれば道は得られよう」

「逃げたるは永遠に闇の道をさ迷おうぞ！」

城之内は勝気に笑い、隣で同じように笑っている遊戯を見る。遊戯もまた、城之内を見る。

「城之内君、この決闘 受けるしか道はないようだぜ!!」

「おう、望むところよ!!」

決られる心（後書き）

デュエルは次回！

いつの話になるのやら・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0250m/>

闇に囚われし番人

2011年12月19日17時53分発行